

○別符御面倒ながら御家來へ被仰聞早々留守へ相とゞき候様奉願上候拜
(此書は宛名署名及び月日を闕く明治三年十二月上旬木戸孝允が京都より共戸磯に贈れるものなり)

一二四 大久保利通宛書翰

明治三年十二月十三日

大亂筆高恕

拜啓先以 御清適奉大賀候彌明曉は御乘艦之由今夕烏渡參上仕候處御外出中に拜青不得仕殘念に奉存候烈寒之折柄別御自玉爲
邦家專要此事と奉存候自然老公上御上京之御都合岩公御在留中に御内定も被爲在候御運合にも被爲至候は、乍御手数數御一書御洩らし奉願置申候此餘御氣付筋之義も御坐候は、何卒無御容赦御示教奉祈候先は爲其奉呈候草々頓首九拜

(岩公は岩倉具祝)

十二月十三日夜

(西郷は西郷隆盛)

尙々西郷先生始諸君へも可然御致意奉願上候弟等も明後朝は乘艦可仕

と奉存候且又過日來逐々申上候通何卒來夏頃までには萬里之遊歴是非是非御供申上度奉願候天下非常之變出來候得はたとへ一毫之御用に相立不申とも艱難之地に御奉公申上度奉存候得共今日之情勢に徐々進歩之姿に御坐候得は五年十年之間決る今日は安堵と申日も有之間敷付るは一日も迅速を貴ひ申候此段御合置被下可然御高慮奉祈候拜

(甲東は大久保利通)

甲 東 盟 臺 御 内 拆

允

一二五 三條實美宛書翰

明治三年十二月十四日

亂筆

御高恕奉仰候

謹啓先以

御清雅に被爲渡恐賀無限奉存候さては松代日田等之擾騷甚以苦々敷事に御座候得共益廟堂上確乎被爲在候得は却る進歩之機會と相成申候人民之

(渡邊は渡邊昇)

方向も彌相定可申候廟堂上におゐて一時之議論に御動搖被爲在候と始終人民之方向不相立而已ならず各々相迷ひ各其職業も勉勵不仕隨ふ今日之事至瓦解申候紛紜之際別々御大事と奉存上候日田等之事も下坂後早速申合せ夫々着手仕候處御沙汰之旨も有之取締向早速相運申候尙浮浪之近情其外上國之様子い曲井上聞多より御聽取奉願候且又彈正中之渡邊大忠段々承り及候事も有之永く當職に被差置候は臺中之處も却る不都合出來候と愚考仕候依る願はくは只今之處に他職へ轉任被仰付候は可然と奉存候東京大坂兩府等も大參事御無人之事に付兩府之内へ御登用ども相成候は別々御都合之様奉存候將來之爲些懸念仕候儀有之決る政府之御爲當職へ被差置候は不可然と奉存上候に付此段内密入御聽申候爲其言上仕度奉捧呈候誠恐々々謹言

十二月十四日

乍恐此書面猥りに他人へ御示し被爲在候は不宜と奉存候間此段被思

食置候様奉願候敬白

御密覽

(此書は宛名及び署名を闕く明治三年十二月十四日木戸孝允が大坂より三條實美に贈れるものなり)

一二六 井上馨宛書翰

明治三年十二月十五日

亂筆御推讀被下御火中奉願候

(大隈は大隈重信)

昨夜は御光來奉謝候弟も今日風之爲に又々上陸如御承知兎角風潮は敵と相成申候さては昨夜緩々拜聽仕候件も有之且弟之出京前逐々傳聞仕候處に亦も意外之世説不少必竟は昨夜申上候通大隈など始獨り他より度が相進み居候譯に亦も尤至極に御座候へども又ものと申ものは三つの足が一つ高く相成過候亦も轉覆之患ひ有之候様之ものに付あれこれに亦老婆心度々人之しらぬ苦心仕候事不少此度も老兄御出に付候は何歎と目をつけ候ものも多く可有之且過日坂本等之行が、りも有之候事に付最初

之處は爪をまづ毛之中へ御入置可然と奉存候弟も別に御急之御用無之候
得は春頃までは御とゞめ可申と奉存候處無余儀御次第に付致し方無之ど
ふぞ當分之中此處は御用心只々奉祈候御嘶も承り少々氣にもかゝり申候
間元より御疎無之事とは奉存候へ共尙申上置候人と申ものは一時口上之
よろしき位にゐは油斷不相成御上京之上は此際之事に付一入御用心奉祈
念候爲其草々頓首

十二月十五日夜

尙々御願仕置候廉々は何卒 (以下欠)

世外老兄御内拆

允

(世外は井上馨)

一二七 鳥尾小彌太宛書翰

明治三年十二月廿七日

其後彌御壯榮珍重此事に御座候過日從馬關一書差出候處御落手被下候哉
於山口も逐々當春來之様子承り候處何分九州邊不取締に浮浪脱卒等之

如きもの縦横往來豊筑藩へも微力と申もの歟曖昧と申もの歟如何とも不
得致益愚民之方向を亂り不都合不少何卒此度は屹度被仰合候御着手有
之度彈臺出張も余程本氣に取調相成候歟之由重疊と存申候山口藩より
は山根秀輔當時日田縣へ罷越居候由同人も春來盡力九州邊も奔走探索致
し候事に付尙巨細之事は御聞取可被成候過日も申陳候通達に遠至に大候
と申云々元より常人之所及に無之御胸算御疎も無之佛前之說法らしく候
へ共先達も迅速に引取候方可然歟之御尊も有之只如此事は鎖事と御考
にゐるこゝ之御所致に相成居候も折角巡察使被差向旁決る爲將來不
宜候に付證據有之候ものは雖藩士十分御糺彈其々御所分相立候様御一致
御一和に御着手有之度奉存候御論も御座候は、近情御洩らし可被下候
鳥田助七と申仁は先達も久留米邊へも罷越候に付此度日田縣迄差越申候
自然相應之用尙有之候は、松方氏など被仰合御遣可被下候先は爲其草々
頓首

(松方は松方正義)

十二月廿七日認于三田尻

尙々于今岩卿も御出無之山縣ども、歸り不申如何之様子歟と相待居申候御序に諸彦へ可然御致意可被下候以上

鳥尾 契 兄御密披

孝 允

(岩卿は岩倉具視)
(山縣は山縣有朋)
(鳥尾は鳥尾小彌太)

木戸孝允文書 卷十一 明治四年

木戸孝允文書 卷十一

一 大久保利通宛書翰

明治四年正月九日

亂筆高恕

先以 御清榮奉大賀候昨日は兩先生御揃に要領相窺實に逐々申上候通
(兩先生は西郷隆盛大久保利通)
 いつれ此機無御坐は對宇内に御進歩遷延難被圖と竊に苦慮仕居候
 處此度此運に被爲至候端相立候上は乍微力當藩にも是非御驥尾に隨ひ
 盡力不仕は不相濟事と奉存候其中知事も御尋問申明日にも住居へ御
(知事は毛利元徳をいふ)
 入之邊も相願可申に付何卒兩先生より御旨趣十分御申聞け可被遣候此段
(西郷先生は西郷隆盛)
 奉願候先生より西郷先生へも可然御取成是仰候爲其鳥渡捧呈仕候草々頓
 首九拜

正月九日

木戸孝允文書卷十一 (明治四年正月)

尙々枝葉之處於東京隨分議論出來候邊難圖奉存候枝葉論とても自然不
至了解邊より時日遷延世上に種々之説論有之候様に其甚不面白歟
と奉存候元より毫も御疎は無之事に卒然申上候は奉恐入候得とも要
領御一決之上は着手之順序先夜粗申上置候通大略相窺置度奉存候此段
御含置玉はり候様奉願候敬白

甲 東 盟 臺拜白

允

(甲東は大久保利通)

二 鳥尾小彌太宛書翰

明治四年正月十四日

亂筆御推讀可被下候此度御面會不仕はいかにも残念に奉存候以上
朶雲相達拜見仕候彌御清榮御着關奉大賀候折角此度は今少し滯藩いたし
候心得に御坐候所
勅使御下向大久保西郷なども來藩是非一應は歸京不仕は不相叶次第に
至り明朝より出立仕候乍不及藩内之事も暴論相發世間之光景將來之目的

(勅使は岩倉具視)
(大久保は大久保利通西郷隆盛)

(山狂は山縣有朋)
(四條は四條隆謨)
(岩卿は岩倉具視)

も相説き置申候尙近況は山狂出關候に付御聞取可被下候頓に御面會と存
候四條公御歸京は岩卿始意外之事に皆失望に御坐候其譯は已に浪華御
發し之節百姓一揆鎮定之事は相聞へ居候へども近來豊筑邊不取締に付此
度は先當分地步御占め此後之御さまり丈けは御着手被成置候譯歟と奉存
候乍去別に御勘考之事も有之候歟其邊は一向不相分候へ共行かゝりは先
右之次第歟と被存申候いつれ他日拜青承知可仕候誠に大取込に付眞之御
答まで草々頓首

正月十四日

允

小 彌 太 兄内拜復

(小彌太は鳥尾小彌太)

三 吉田右一宛書翰

明治四年正月十五日

先以御清適大賀此事に御座候さては昨日も御内話仕候通何分にも上下之
情實昨年來凝滞仕居候邊不少殊に時勢變遷之際に付余程御誘導之御手段

木戸孝九文書卷十一 (明治四年正月)

百七十五

(八組は長藩馬廻格の士を大組といひ後之れを分ち八組の士といふ)

無之るは前途之運歩甚御六つケ敷と奉存候且又御國にも元八組已上之處大に破格之姿に至り候へとも其已下は人撰等之事も十分に無之已に此度も其邊之儀諸彦へも得と相論し置申候何卒人才は已下之ものにも順序に不關御拔擢有之度他藩に比し候と是等之處は御國之舊習甚敷と相考申候今一應拜青可仕と奉存候所何分多端に昨夕今朝不得寸暇候御含置乍此上御盡力は祈候其中時下御自玉第一に奉存候草々頓首

正月十五日

準一郎

右一郎老兄御内披

(右一郎は吉田右一)

四 三條實美宛書翰

明治四年正月廿三日

大亂筆乍恐御推覽奉仰願候百拜

謹呈先以

御清健に被爲在恐賀至極に奉存上候さて此度薩長へ

(岩卿は岩倉具視)

(大久保は大久保利通)

(西郷は西郷隆盛)

(板垣は板垣退助)

(島津は島津久光)

(毛利は毛利敬親)

(山内は山内豊信)

(廣澤は廣澤兵助)

勅使岩卿御下向

叡慮之旨難有奉感戴此後一層盡力不仕は臣子之分元より難相立一統奮起仕候尙岩卿より御内諭之旨も有之大久保一同土州へも罷越西郷も同行仕い曲旨趣申陳候處元々同論同意板垣も一同上京之運に至り申候付は島津從三位毛利從二位同様山内正二位へも御懇篤之御沙汰被仰出尙於御前親敷

叡旨をも被仰聞格別不同無之様可然奉存上候い細岩卿より御書通可被爲在と奉存候得共懸隔り候儀に付御双方へ申上候于時昨廿二日神戸に着艦仕去る八日廣澤不幸之始抹初承知仕驚愕悲憤何とも絶言語候次第朝廷上之御事は奉申上るまでも無之私情におゐても實に片時も難堪必竟此元因を推考仕候へは長州之脱賊九州邊始種々之疑説を以人民之方向を亂乍恐

朝廷上之御取締は一向相立不申終に如此之事體に至り申候付は此責を

已に期し山口藩一致盡力餘賊を一掃仕天下之方向一定仕候まで死力を窮め申候間藩より願出候事も御座候は、迅速被遂御許容候様奉歎願候かゝる上は先

朝廷上之處薩土二藩におゐて一入盡力之邊只管希望仕候從今

朝廷上曖昧之官員御黜け廣澤暗殺人も外國人暗殺人同様嚴密之御詮儀奉

(大村は大村益次郎)

願上候大村暗殺人今以一人不相分もし外國人と地を同敷仕候ときは今日迄之遷延には至り申間敷歟と奉存長州人は一入私情におゐても苦憂悲歎

仕候任幸便乍恐愚意言上仕候偏に

御容赦奉願上候誠恐々々敬白

正月廿三日

孝 允

三條公閣下内謹呈

(三條は三條實美)

五 松田道之宛書翰

明治四年正月廿五日

亂筆高恕
朶雲拜見仕候先以
御壯榮奉大賀候さては今夕態々御下坂之由奉恐入候弟も實は暫時之滯坂に甚取紛居申候態と御光來被成下候も甚恐縮仕候間參上仕候不苦尤御序も御座候へは十字より十二字之間差間無御座此段任御尋申上候尙無御容赦被仰聞可被下候左候へは繰合せ參上可仕候草々頓首拜復

正月廿五日夜

木 戸

(松田は松田道之)

松 田 先 生 拜 復

六 榎村正直宛書翰

明治四年正月廿六日

亂筆御免

(東京大變は廣澤兵助の遭難をいふ)

過日は朶雲御投與難有拜見仕候彌御清榮に引つゝき御盡力奉大賀候神戶着船始る去る八日東京之大變承知實に驚愕悲憤絶言語候次第遺憾難堪奉

木戸孝允文書卷十一 (明治四年正月)

百七十九

(廣澤は廣澤兵助)

存候何分にも此まゝの光景には始終如何と慨歎仕候此節斷乎たる御決評は無之は所詮前途之目的は難相立と存申候乍去廣澤なども必竟其邊之處切迫に相憂只管

(松田は松田道之)

朝廷之御爲と存込却る他之曖昧より一人此難を受け候様之次第いかにも痛歎悲泣之至に御坐候尙近情聊松田大參事も相談置候間御承知可被成下候先は任幸便一書相呈候草々頓首

正月廿六日夜

允

(十八眞兄は横村正直)

十八 眞 兄御直披

七 柏村數馬宛書翰

明治四年正月廿七日

亂筆高恕御推覽可被下候

(板垣は板垣退助)

去る十六日華浦揚碇十七日晚高知に至り翌十八日板垣大參事來訪彼藩近來大改革已に昨春も知事公態と薩州へ御出も被成候次第に偏に兩藩に

隨ひ今一層爲

朝廷盡力仕度之旨趣に今日之大勢を想察仕候は前途之處いかにも切迫に存必竟御一新と申も

皇國御維持之目的不相立は元々幕政に異なる事なく從來之勤王も何の所以たるを知らすと奉存甚長歎罷在候所此度薩州之主意等も承知土州一藩之幸に無之爲天下奉大賀候儀に付元より無二念御同意仕候乍去一應知事にも可申入との事に廿日まで何事も相運板垣も東行と相決し申候廿一日當地揚碇廿二日十字過神戸へ着艦直様揚陸仕候處突然去八日之大變承知仕實に驚愕悲憤絶言語候次第只々如夢心地仕一同茫然逐刻移時候に隨ひ益不堪殘慨遺恨嘸々御悲憤御痛慨と奉遙察候廣澤御留守中第一北堂君之御愁傷何とも不堪申上且又

(兩公は毛利敬親同元德)

御兩公様にもいかばかり歎御悼惜可被爲在と奉恐察候弟等一統におゐても誓ふ慰靈魂候様草を分ち候も相報ひ不申は不相濟長州も人情輕薄

如他事思ひ候徒も可有之と存申候得共又壯士中頼母敷ものも不少付あは
今般

勅使御下向に付薩州始盡力を一段落は凡決局何と歟

御沙汰も可被仰出候へども其余の處は長州は長州丈だけ處を以

朝威の相立死者の面目を不令恥聊靈魂を慰候様決論無之のは不相濟依り

(杉は杉孫七郎)

杉權大參事先達の東行の都合に相決申候い曲は逐る可申上候間左様御承

(高杉は高杉小忠太)

知可被遣候別に高杉翁へも不申上候間此主意御傳致尙

(宮木は宮城時亮)

兩公様へ被仰上置可被遣候不日宮木歸國仕候間大略申合置候別紙は御留

守へ直様いかにも得歸し不申御手元へ差出候間可然奉願候爲其草々頓首

拜

正月廿七日

二白近來御令弟別の御勉勵舊冬弟へ被投候書則於

御前も入貴覽候通の次第に大勢御想察偏に爲天下御盡誠前途を御苦

憂被成居身を以御先し拔羣御配慮の處天道如何此度の御災害いかにも
不堪悲憤遺恨付るは於御國も益御奮發内外の主意齟齬不仕爲萬世終始
御一貫偏に奉祈念候於東京御書面出候は、早々杉始より御報可相成と
奉存候拜

柏 邨 老 臺御直

允

(柏邨は柏村數馬(信))

(二月四日返答)

八 内海忠勝宛書翰

明治四年二月二日

亂筆高恕

昨日來度々御光來奉謝候さては別冊二當御縣御心得に可相成事も可有之
歟と奉存懸御目申候九州諸藩情實書は肥後に余程探索いたし候由肥後
人より承知せましに御座候御入用に候は、寫させ被下候は、本書慥たな
る早便に御返し可被下候奉頼候先は爲其草々頓首

二月二日夜

木戸

(内海は内海忠勝)

内海 様御内披

九 森寺常德宛書翰

明治四年二月五日

朶雲拜見仕候昨日は態と御光來奉萬謝候御歸之節は弟こそ取紛失敬申上候御容赦奉願候御留守へも多用中に付勿卒御尋申上候皆様御清安之御様子に付御一統様もは拜顔不仕候烏渡御屋敷へも參上可仕と奉存候得共不快に不服藥等も仕今に外出不得仕候先は御答旁草々頓首拜復

二月五日

尙々薩土へは何卒兩先生御出此節之御主意得と被仰談置度奉存候必竟今日まで同志允不申盡力仕候も只々天子之御誓言奉基速に爲皇國地球中へ卓立之御規模相立度と而已存込候處第一知藩事どもより

違 命背誓官員是に黨與仕候様之風體に不は切齒に不堪いかなる智者勇者有之候とも此まゝに不は如何とも難仕事と只管泣血仕候尙拜青御高論を相窺可申候以上

老 兄拜復

松 菊

(此書の宛名明ならず或は森寺常德に贈りしものなるべし)

一〇 門脇重綾宛書翰

明治四年二月八日

朶雲奉拜誦候先以御清榮奉大賀候過日は態と御光來奉謝候さては不存寄見事之鮮鱗御惠投御高意難有奉存候いつれ拜青御禮申上候先は御請まで草々頓首拜復

二月八日

孝 允

(門脇は門脇重綾)

門脇 老 臺拜復

一一 岩倉具視宛書翰

明治四年二月十日

捧呈亂毫奉恐入候偏御推覽奉願候再拜

謹啓先以

(三藩は薩長土)

(西郷は西郷隆盛)

御清雅被爲居恭賀至極に奉存候さて此般三藩之一條成否之工合實に前途之興廢に關係仕候間事實々着に御運相立迅速其功驗相顯候邊只管奉祈念候於薩藩は一入奮勵誠に感佩之至に御坐候西郷氏等之遠摸大度今日國家之大幸無此上事と雀躍之至に奉存候然るに允等淺慮不悟其深旨曾る薩藩と有同難約有共前途約依る只々御一新之際同志相誓

御親誓之

叡旨奉戴し一貫可相盡と不顧微力奔走仕候然處前年長州内外數度之大難あり然るに又去年藩内之一大難を生ず皆聊報國之微志を欲達所施不得宜前後人類を盡す實不少是渾る人之罪にあらざる也去月廿五日之夕西郷氏説あり天下諸藩之人才を抜今日之政府を抜く難にあらざるなりと去八

(右府公は右大臣三條實美)

日右府公之邸におゐて又此説を聞或又責不審之藩之説あり然して允同憂之士空斃死するもの數人又去年之難之如きに至ては脱走近隣を煽動し人民之方向を亂り其黨を嘯集す依る屢其情を歎訴する數回其意未貫却る近隣之嘲笑を招く又

朝威を汚すの罪不少于時今日西郷氏等之説を聞不知時機を慨歎し一跌再跌國事を誤る之罪を恐る若待今日西郷氏等之驥尾に隨ひ犬鷲之力を盡すを得は何ぞ如此之患害をのこさむと百憾難禁悲切之餘不覺過日右府公御前におゐても痴情縷々吐露而して忽慙悔愧悟再薩人に不忍對面付るは何卒將來之處薩之關係は總而山縣狂介へ相托し置可申と奉存候間仰願わくは山口藩歎願御許容被仰付度奉百願候左候へは彼一段落御目的大略相窺候上天下惡物之標準と相成る

朝廷爲舊藩爲亡友聊盡力仕度と奉存候偏に

御憐察を玉わり御聞濟之程懇願之至に奉存候誠恐々々頓首九拜

二月十日夜

再白 允先年來屢不快日々參

朝も不得仕依る退職奉願居候處昨年強

御沙汰之趣も有之且廣澤故參議に右府公被仰聞候旨も奉窺暫參仕仕候

處最早窺置候通御沙汰奉願候敬白

御 密 拆

孝 允

(廣澤は廣澤眞臣)

(此書宛名を闕く明治四年岩倉具視に致せるものなり)

一二 河瀬眞孝宛書翰

明治四年二月十五日

大亂筆御推覽可被下候小倉右衛門介渡海之節教師雇入之一條申含置

候事も有之鮫島之處へも可申參其御含に格別之人物御雇入之程奉

祈候拜

先以御壯榮に御勉勵奉大賀候去歲之朶雲此節相達拜見仕候老兄より之御

(小倉右衛門介は後馬屋原次郎)
(鮫島は鮫島尙信)

書翰逐々相とゞき是よりは一々御答も不仕候乍去御一新之始前途之大目的を論し宇内之大勢を推考仕候處に

皇國維持之方略其大概を盡し

天子御東幸之日弟も供奉仕大津之驛に夜半に至るまで相認得と御高論

をも窺度と奉存周布金槌へ託し神戸より老兄へ御送り申候都合に相計ら

ひ置候處終に不相達之様子に一向御返事も不參近頃御様子承知仕候へ

は全途中に相消へ候歟御手元へ不至よし甚残念に奉存候乍去又其節と

自然變遷至今日候は意外之事も不少然し目的之處大綱におゐて更に相

違仕候事は無之元より文明開化之域を望み候とも自ら

皇國はまた皇國萬世不可換之體も有之又可改之事にして十年を不待は不

能施之事件も不少則決可行は不可數候へ共兎に角多事之際實に可歎は只

其人之乏敷を是又從來乏敷所以有之候事に付何分にも人才養育之處尤急

務と奉存候于時老兄御歸國之邊も昨年來頻に喝望仕候處折柄幸佛未曾有

(周布金槌は後周布公平)

之大戰宇内之大勢にも關涉可致聞も有之不可逢之折柄に付今暫御滞在可
然などと段々 思召も有之候處頃日之様子傳承仕候へは彌止戰和議に至
り候由付るは何卒迅急御歸 朝之處只管御待仕候且又過日品川彌二郎へ
も傳言仕早々歸 朝候様にと奉存候其故は六七年之後は元より不十分と
も段々人才も出來^{學成就}之徒も輩出可仕彌二郎などに仕候も今より學文
と申候も其志丈成就仕候には余程之年數も費し不申るは不相成事に付
今日無人之間をおぎなひ候方却る後人之爲歎とも奉存候付るは何卒老兄
御歸朝之節御連歸に相成候へは別可然奉存候

(廣澤は廣澤眞臣)

朝廷上府藩縣之官員にても十分之二は一向時勢も不相解者而已にる世人
は千人中に一兩人も合點仕居候もの有之候歟も無覺束日暮路遠之有様隨
分想像仕候へは氣がもめ申候已に御承知にも相成候歟實に可大痛歎は廣
澤參議過日不圖不慮之難に斃れ誠に殘慨悲切に堪へ不申巨細相認候にも
不忍同氏近來尤盡力大に時勢之不進を痛歎仕居候處如此次第にる一昨年

(大邨は大邨益次郎)

は大邨之變有之是等之事にても御想察可被下候元より百折不撓之處
朝廷上確乎無之は不相成儀不待言候得共又不可盡筆頭之情實も有之申
候廣澤之變にも折柄弟は歸藩中にる別る殘念至極遺憾千萬に御座候

(徳公は元徳山世子毛利平六郎元功)

○徳公始御同行之諸氏其外在留之少壯學文逐々進歩候事と乍陰相樂み申
候御序に諸氏へ可然御致意奉願候且豚兒當年十一歳に相成英學を一昨年
より心懸け居候處此度撰擧候不日英國へ罷越候に付自然御發前に候は
し宜奉願候御序に何卒鮫島へも可然御託し置可被遣候幼年にる未日本の
學文も元より半途に御座候間如何哉と奉存候處友人之すゝめも有之當人

(鮫島は鮫島尙信)

も頻に望願いたし候故任其意差越申候大略之事は逐々御承知も可被成實
に筆頭に難盡事而已に御座候間只々御歸朝之日を屈指御待仕候其中時下
御自玉第一に奉存候草々頓首

二月十五日夜深

(御堀は御堀耕助)

尙々御堀も兎角不快勝にる近來之容體承知仕候處にるは甚懸念いたし

申候何卒快方え傾かしと只々祈り居申候以上

安四郎老兄内密御直披

準一郎

(安四郎は河瀬安四郎後河瀬眞孝)

一三 伊藤博文宛書翰

明治四年二月十八日

尙々御推讀可被下候野村素介藤井勉三等も當初夏頃より洋行之都合に御坐候

爾後彌御壯剛に御盡力と珍重此事に御坐候御調らへ一條も逐々御運に相成候由傳承爲國家奉賀候弟も舊冬十一月俄に歸藩西郷大久保なども山口へ入來尤岩倉公勅使として鹿兒島へ御出其より山口へも御廻りに相成申候弟は諸氏之すゝめに隨ひ共に土州へ至り當月三日に歸京いたし候此度三藩の兵を盡 朝廷へ出し候都合に相成申候最上之策と申譯にても無之候得ども藩々様々之情實有之中々一様には難參三百余之政府を立三百年來養來候故人情風俗は不及申數里相隔候も言語までも異同有之候様之

(西郷は西郷隆盛)
(大久保は大久保利通)
(岩倉は岩倉具視)

(廣澤は廣澤眞臣)

事に付實に迅急には難相進十年を待候事と則決之事と區分を成し着手不仕は却る於實事上及遅延候事も可有之歟に相考へ申候是等之説も御傳承相成候は、定る御不審も可有之と奉存候へ共巨細之事中々筆頭に難盡何分にも世間之着目いたし候處之大藩より擢け候方略相定り居不申は諸事隨ち皆凝滞に至り申候于時可大歎は正月八日廣澤參議横死一條弟も神戸へ着之上突然此事を承知いたし只茫然時移り刻移り段々事實を得實に殘慨悲切に堪へ不申同氏も昨冬來別ち奮勵東京等之取締も余程相任し盡力仕居候處如此之次第何れも遺恨千萬に御坐候今以賊を獲候事も出來不申切齒之至御垂察可被下候歸京之上も逐々承知仕候處舊臘は余程浮浪ども、入込物情騒然いたし候由昨冬信州にも大一揆出來松代などは城下は半は焼失近縣にも波及官員も横死いたし候もの有之候日田縣も同様に已に弟等浪華へ出候此承知候間早速兵隊を差越取締相立候都合に繰出候處思ふ様に參り兼甚殘念に奉存候此度は斷然九州へ邊も着手い

つれも巢窟をあはき盡し候覺悟に御坐候何分にも内が締り不申は百事
瓦解に至り申候官内一致に御坐候得は國內之取締不相立理は無之國內一
致之上は外國と雖も亦恐るゝに足らす然る處根本之兎角確乎と不仕處よ
り後から水火へ引込候様之工合有之困却至極に御坐候何分にも速に此弊
を一掃不致は不相成と頻に苦心仕候何卒御用向も大略相片付候はふ
らく御遊歴も有之間敷候得ともどぶぞ速に御歸朝奉待候先は任幸便一
書得貴意申候頻に木梨之病氣其後如何と掛念而已いたし候萬一不工合に
有之候は、定る何と歎到來も可有之候得ども一向様子不承處は少々安
心いたし居候位別に書狀も出し不申候間可然御致意御願候御留守にも御
一統至極御堅固御安心可被成候來原頑姪黒田了助便りに米國へ留學之爲
め差越し申候間尙可然奉願候草々頓首

二月十八日

允

春 畝 兄御内披

(來原は來原彦太郎後木戸孝正) (黒田了助は黒田清隆) (春畝は伊藤博文)

一四 吉富簡一宛書翰

明治四年二月十八日

御手紙拜見彌御清安珍重此事に御坐候さて御紙上縷々承知仕候元來舊冬
歸藩掛け大隈と談合仕候節も兄之事に及び大藏省へ出仕之運にも可至都
合御坐候處忽と申事にも参り兼一先小管へ談し置候行懸りも有之今日ま
で之都合に御坐候小管之方半途之事無之候は、早々御出仕有之度相考申
候建言之一條も不及御沙汰處に至り候へども其よりして少々九州而已な
らず着手之邊には相運申候面上ならてはい曲難相盡奉存候御留守にても
有之一應御歸藩願被差出候とも不苦事とは奉存候得共當時大藏省之處緩
急繁閑之邊如何に候哉弟も不相分何も面上之節と申縮候草々頓首

二月十八日

允

樂 水 兄内御返

(樂水は吉富簡一)

一五 三條實美・岩倉具視宛書翰

明治四年二月廿六日

奉捧早亂筆奉恐縮候種々愚按之件々言上仕萬一雖
謹呈先以

御揃御清榮被爲在恐賀無限奉存上候孝九今曉達神戸直に浪華に至り申候
兩三日中に帆可仕と奉存候井田大田黒等も未滞坂廿八九日頃西下之由

(井田は井田大田黒等も先年
田讓大田黒は
大田黒惟信)

に承知仕候所至有志之説を承知仕候處只々

朝廷より浮浪へ御手を被爲着直に又浮浪等を御登用相成隨大村一條等出來候事を論し何分にも今日之處

朝廷之日に陵夷仕候を慨歎致し候もの不少逐々言上仕候通此度薩長土之

一條に御様子不奉窺はと申甚懸念仕候類にやケ間敷相論し申候付は種々説論も仕候へ共至極不安心に申居

上策は人に依る成り下策は勢に依る成る其弊を得と御注目無之は實に

御大事と奉存候付は將來此餘勢に制せられぬ御工夫誠に以肝要至極と

奉存候諺云毫厘之違ひ千里之違と相成候と申事も是等之御事に

朝廷上公正之道を御曲被爲遊候ときは一旦薩長土を以壓すると雖も必諸

藩誓り不服又薩長土も終に必不合もの出來仕候は必然と奉存候萬々一も

朝廷上におゐて薩長土へ佞する如き御所致有之候は一大變に下策之

破る、最早真に可救之道無之飽まで條理は明白に御貫示被爲在度奉萬禱

候付は過日言上仕候件々逐一御高按之上御着手奉願候尤筑前一條之如
きは三藩之兵相去候後に決り十分之御着手萬々御六つケ敷は申上る
迄も無之天下之事隨り相去可申と苦念仕候精々速に御勇斷奉仰候兎角
朝廷上之御事は何も紙上之御次第而已に實事を被爲責候事は尤御緩寛
に付自然忤恩侮威

(廣澤は廣澤兵助)

御主意決り徹底不仕舉前蹤候へは一跌再跌不可敷事而已皆九等之大罪と

奉恐縮候今日にても一事を以論し候へは廣澤參議御取締も聲之上には

屢嚴重之御沙汰御座候へ共眞偽は存不申候へ共東京府之斷獄悠々不斷な

ども頻に取沙汰仕候由舊藩之ものども、傳聞仕候る甚遺憾に存候ものな

ども不少着坂後も重る是等之事を承知仕候總り聲上之事よりは實事上之

事を厚く御責め被爲在度一令出れば必其事之行ると不行を御注目被游

誓る曖昧姑息に不陷様御督責有之候ときは必徹下不仕儀は有之間敷と奉

存候且又(以下欠)

(三條は三條實美)
(岩倉は岩倉具視)

三條公 閣下御密覽
岩倉公

孝 允 拜白

(此書は月日を闕く明治四年二月廿六日)
(木戸孝九が條岩兩公に贈れるものなり)

一六 三條實美宛書翰 明治四年二月廿八日

(井田は井田謙大田黒信は大田黒惟信)

乍恐本書へ縷々申上候通昨日井田大田黒等へも面會段々上國之近情承知仕候處何分にも
朝廷上面從腹非之徒速に御退黜相成不申は諸省とも其氣脈連類
朝廷上始終自ら取り自ら捨る事而已に百事百令所詮無益と甚長歎仕居毛利恭助なども彈臺上之事却
朝廷より苦憂仕居申候舊藩之ものども是等之御様子逐々傳承仕痛慨之餘昨日共も夜半に至るまで此邊之議論承知仕候事間斷無御座遙に朝廷上之事を奉恐察何卒此後之處如何と深く奉懸念候政府上は不及申彈

臺其外今日に訖度御詮儀被爲在斷然不良之徒御退黜被仰付度爲皇國只管奉希望候且又再應言上仕候は奉恐入候得共福岡之一條等誓而此時機を御誤被爲在候は百事瓦解將來之處決る維持無覺束奉存候間斷乎速に御發令奉祈候刑部も兎角因循に相流申候間御鞭策被爲在是非此際を不被爲失御所致奉萬願候敬白

二月廿八日 曉

允

(此書は宛名を闕く明治四年木戸孝九が三條實美に贈れるものなり)

一七 檳村正直宛書翰 明治四年二月廿八日

大亂筆御推讀可被下候

(廣澤は廣澤真臣)
(杉は杉孫七郎)

爾後彌御壯榮に引つゝき御盡力奉大賀候さて過日朶雲御投與被下候處駈違漸於當所拜見仕候山口藩建言書元より相違無之弟未東着不致已前に候へ共於神戸廣澤之大變承知いたし不取敢杉大參事東上之都合可然と相決

し且官中におゐても遺憾至極之情も不少々世上之議論に涉り候事も可有之候得共心事は後世に托したとへ今日狂と呼るゝとも賊と呼るゝとも一番相任し候る賊徒を一掃いたし不申るは中々今日之有様容易に奮起之目的も難相立と粗相議し於東京建言之都合に相計らひ置候處則御示御別昏之通之建白に相成申候乍去諸藩も段々奮發肥後などは尤盡力薩土などよりも逐々言上候邊も有之終に此度薩肥土三藩へ九州邊之事も巡察使に倍從必至相盡し候御都合に御達相成越前因州備前どもよりも實に朝廷上之事を苦憂仕兇徒一掃御根軸を被爲清候邊に付候るも誠實に建言も有之申候依る自然と諸藩之黑白も相分り申候一統慨歎悲切之餘相計らひ候事も有之突然御承知に相成候るは御不審も御尤と奉存候巨細筆頭に難盡いづれ他日を期し可申と奉存候如貴諭益奮勵不致るは中々前途之事も容易に無之此際別る御大事と奉存候乍去兎角大村等存生中より一患害も根基に有之候歟に被相察語るに不被語苦情も不少いづれ是等之事も

(大村は大村益次郎)

迅速何と歟御所致無之るは決る不相濟事と奉存候廣澤一條も今以分明に御手も不相立何とも遺恨至極如此次第にるはと頻に氣をあせり候へ共手がり不相着甚以歎息に堪へ不申候久留米島原藩などは不審之事不少秋田は始終氣脈相通し候に相違無之逐々相縛候徒も秋田邸へ潜居いたし居候もの不少實に佐竹と申ものは可惡之至に御坐候於京都も決る御油斷不相成と奉存候觸頭一條等い曲承知仕候第一國重等も爲其に觸頭補助も被命候次第に付右等之邊肝要盡力京府とは別る氣脈相通不申るは不相成此邊之儀無御容赦御論じ可然と奉存候先は御答旁大略相呈し申候其中時下別る御自玉第一に奉存候草々頓首

(國重は國重正文)

二月二十八日夜半

尙々木屋町賣屋之事御多務中態々御示忝奉存候先年拜借いたし居候五番路じ先買得仕度一度に兩家と申候事も些六つヶ敷四月には是非一應上京可仕と奉存候間尙何も御相談可仕奉存候間其内之處よろしく丸々

奉願候○本文申上候諸藩建言書も弁官へ被仰越寫し等は流布致し世人も諸藩之模様承知いたし候も可然と奉存候以上

(横村は横村正直)

横村老兄内密御直披

本戸允

一八 北川清助宛書翰

明治四年三月四日

爾後彌御壯榮奉賀候さては此度御用有之歸藩仕候舊冬は通行懸不相變預御高意難有奉謝候且又別符至極乍御手数何卒御届被成遣候様御願仕候先は爲其草々頓首

三月四日

準一郎

(清介は北川清助)

清介様御直披

一九 鈴木直衛宛書翰

明治四年三月十二日

彌御平安珍重此事に御座候さては羽州米澤一時尤疲弊候處養蠶之事相開

け近來に至り候は其利尤大窮民も大に成立ち申候別二冊昨年相頼み置手に入申候間御送り申候得と御熟覽有用に候は、於御國御上木相成偏く其心組有之候もの御示しに相成候は、また一助歟と奉存不取敢御送り申候乍然此外に逐々相開け容易に相成候事も可有之歟と奉存候其邊は御取捨申上るも疎之至と奉存候先は爲其取急勿々頓首

三月十二日

尙々自然御上木にも相成候は、一冊拜見仕度奉存候以上

(直衛は鈴木直衛)

直衛様御直

準一郎

二〇 吉富簡一宛書翰

明治四年三月十六日

御推讀後御火中々々

彌御壯剛に内外晝夜御盡力と御察申候過日一書差送候處御落手被下候哉彼密計於御地も已に露顯之由於爰許は過日申越候次第然此節は七十五

(秋元源太郎は秋本源太郎)

日に至り不申候得とも噂さも止申候九日十日之頃御留守へ参り申候御一家御無事御安心可被成候折柄秋元源太郎等始に落合半日ほど相嘶民情其外眞實之談話而已承り近頃之懐乍去人民安着之御手段本氣に御世話無之は往々之處實に如何と深く苦愛いたし候士族之不平と違ひ農民とも之の情實におゐては無理からざる事も不少吳々も此處は御誠實を以安堵に至り候様御誘導之邊肝要と相考へ申候さて又此度馬關之招魂祭へさそわれ且長府人へも少々面會いたし度儀有之纔か一日位之滯留に於出浮申候馬關之御舊志よりも不平如山承りいつれ歸京御嘶可申候右之仕合故御違約申不本意至極に御坐候へ共十六日當日右之譯御斷り申家來之もの差出申候弟は後日に参り申候さて爾後御地之近情如何に御坐候哉於西京も數十人之捕獲有之候由何分にも今一層嚴重に御取締有之度後便に片野之方又は穴戸之方御承知之邊御洩らし可被下候廣澤一條之賊も速に捕獲無之は人々へ之返答も出來兼只々

(穴戸は穴戸幾)
(廣澤は廣澤眞臣)

(知事は毛利元徳)

朝威之不相立處を恐入候外無之候且又知事公御出京被遊候に御決定御國之事も一々目に見へ候様不相運とも其迄に逐々進歩之御手段は訖度御着手無之は不相濟と奉存候先は任幸便得貴意申候其中御自愛元氣に目のはひ之逐ひ拂われ候様第一と奉存候頓首

三月十六日

尙々御盡力一條世外又々邪魔を生し候歟之由乍去是は天下一統籌物之風評流布決る不被行事を相考へ申候間是非最前之約無相違御盡力可被下候萬一も御違反無之は百年之失望に御坐候御火中々々

(樂水は吉富簡一)

樂水 兄極密御獨披

鐵面生

二 檳村正直宛書翰

明治四年三月十七日

(國重は國重正文)

亂筆御推讀奉願候御序之節國重へも可然御致意可被下候彌御壯榮御精勤奉存候さては此程朶雲御投與於三田尻拜見いたし候弟は

木戸孝元文書卷十一 (明治四年三月)

二百五

其より直に鳥渡馬關に用向有之纔一兩日之滯留に罷越申候九州邊之様子も未一向相分不申何卒此度は徹底着手相成候様にと只々祈念致し候御國も爾後都合相變り候事も無御坐此度士族卒一統之御布令相成從來之卒之名目は被廢申候且又來月四日五日頃には

(知事は毛利元徳島津忠義)
(老公は毛利敬親島津久光)

知事様御發途御東上に御決定薩州知事公も當廿六日より御東上之由申來り候いづれ様も皆 老公之御代りにる老公方は暫御猶豫被仰上候薩も昨冬來之様子にるは大分奮發一入はまり是非

朝政を御輔翼申上るとの事に御座候何卒勤王之藩も終始有之度事と只管其而已希望仕候于時此度之御捕獲實に不相變御手際之至と必竟爲邦家大悅仕候近來承り候處越後邊未一向不相開豪富之ものども、流行後れにる八九年前も同様に相考段々浮浪を相構^カひ置時を窺候^カる時々三都府などへも出かけ種々煽動などいたし候事も有之候由越後之根據も一應ちらと承知仕相認置候得共只今相知れ兼候に付御送不得申實に御管轄外之事に

候得共兎角其害は三府に及び候事に付何卒相應之人柄御座候は、越後へは常に探索被入置候は、御締り向におゐて別々可然歟と奉存候愚按之まゝ申上候先は爲其一書相呈申候時下別々御自愛第一に奉存候草々頓首

三月十七日於馬關認明日より

歸鴻之積りに御座候

尙々御多務之央態々木屋町之一條も被仰下奉謝候尙よろしく奉願候且又別昏瀧中方へ相とゞけ度御家來より此使之ものへ瀧中宅示教候様御一命奉願候以上

(十八眞は横村正直)

十八眞老兄御内密

允

二二 南野一郎宛書翰

明治四年三月十七日

(入江は入江和作)

昨宵は嘸々御疲と御察申候今日之風雨實に殺風景之至に御坐候さて昨夜ちらと御嘶仕置候入江竹田之一幅今以眸前を離るる不能讓吳候得は元

木戸孝允文書卷十一 (明治四年三月)

二百七

より當然の相場を越へ候不苦萬々一も六つケ敷候得は暫借用いたし度
何卒御高配相願申度此節も出關中之又一樂と相考候處主人不在に實に
失望御憐察可被下候先は御願まで草々頓首

三月十七日

尙々近來風流家之風俗卑烈に至り弟等容易に借用などと申事も申兼候
何卒可相成は讓もらひ候へは無此上左候へは弟所持竹田之雜幅拂盡候
積に御坐候どふぞ御含被下可然御盡力奉願候以上

南野 兄御直

木戸

(南野は南野一郎)

二三 尖戸磯宛書翰

明治四年三月廿日

(薩州知事は島津忠義)

亂筆御高恕先日士卒合併之御沙汰相成申候老臺之思召如何と奉存候
先御沙汰書御示諭書等此度間に合不申定る藩邸へ差越候事と奉存候間御一覽可被遣候以上以御清適に御精勤奉大賀候さて御國も別に相變り候事無御座候薩州知
事公來る廿六日御出立之由過日彼藩より申來當御方におゐても

(知事は毛利元徳)

知事公來月四日に御發途之御都合に御決定と先相成申候此後相違は有之
間敷歟と可奉存候左候へはいづれ十日頃之御着京と相成可申候九州邊之
様子も其後絶る近情不相分此度は徹底取締向も行とゞき候様にと奉存居
申候隨る三府は勿論此機會に地方之取締嚴重相立候邊實に肝要と奉存候
乍此上御盡誠只管奉祈念候廣澤一條之賊未御手がりは無御座哉一日も
速に御捕獲之御左右相窺度於御國は此一條實に人心に相係り居申候尙御
序も御座候は、御近情御洩らし奉願候于時又福原内藏之允此度歸京仕候
處同人事如御承知近眼に兵隊之世話など申事余程苦心之由に昨冬來
も心事承り居兎角弟も失念仕り逢度ごどには氣の毒に相考へ申候實に同
人も昨春などは一入盡力も仕且方向もよく相分居命せられ候事に候へは
入はまり盡力もいたし候ものに付御省中に相應之處も御座候は、御登
用相願度此段申上置候任幸便真之一書奉呈候其中時下御自玉爲邦家第一
に奉存候草々頓首

(廣澤は廣澤真臣)

三月廿日

尙々過日御留守之御様子爲相窺候處已に御出京に被爲成候由定之當節は御安着と奉存候拜

(敬字は木戸)

敬字 老兄御直拆

木戸

二四 南野一郎宛書翰

明治四年三月廿一日

爾後彌御清安珍重々々さて過日滯關中は彼是預御高意萬謝此事に御座候途中も且々雨具を不用大に仕合申候于時御願仕置候彼一幅い細は其節御嘶申置候通に聊にゝは迷惑筋に至り候は却る風流之趣を害甚不面白相考へ申候間其邊之處御合被下何卒成就仕候様御盡力平に御頼仕候乍去ほれたるを又余り謀り過候も眞之美人之主意には有之間敷候間和作にも方外之事は申ましくと存申候只管御吉報を奉待候さて又知事公御發後前後より是非深溪へも一游いたし度必御出浮御待申候草々

(和作は入江)

(知事は毛利元徳)

頓首

三月廿一日

尙々御願之一條様子相分次第早々御一報御頼仕候以上

(南野は南野一郎)

南野 兄御直披

允

二五 河北一宛書翰

明治四年三月廿四日

朶雲奉拜見候明廿五日一字頃より

御下り被爲游候段い細奉畏候此段よろしく御取成奉願候草々拜復

三月廿四日

尙々先日來之雨に甚惡路何とも奉恐入候拜

(河北は河北)

河北 様拜復

木戸

二六 河北一宛書翰

明治四年三月廿五日

木戸孝允文書卷十一 (明治四年三月)

二百十一

(從二位は毛利敬親)

過刻は御懇切に被仰聞難有奉存候實に從二位様御病氣迅速御折合被爲在候様只管奉祈念候さては過刻御内々御噂之次第に付決る達申上候儀に

あは無御座候へども自然逐々御折合も被爲在知事様御下り被爲游候御都合に御座候は、鳥渡其段否御御内々もらし被遣候様奉願候草々頓首

三月廿五日

木戸

(河北は河

北) 様御内密

二七 山田顯義三好重臣宛書翰

明治四年三月廿六日

鈴木靜雄其外入薩罷在候始末兼る嚴重從朝廷被仰出候邊も有之巡察使一統も驚愕苦心公然巡察使に申出候は護送之令を候上今日まで潜匿を免し候罪を不問は不相成左様相成候は一難事出來候に付山口藩より之受取人として兵隊世話役秋村欽一郎島田助七山縣太郎吉同行爲致直薩

(御堀は御堀耕助)

(李家は李家文厚)

(河野は河野龜之進)

藩被差越候由付は一應長崎に被立寄御堀へも相談いたし候都合に付今日李家口氣にては自然御堀考違之儀有之候も不都合千萬に御座候間右之趣大略河野へも御申談被下候様仕度左候て元來之次第は河野承知に候間旁可然と奉存候已に秋村等長崎へ参り間に合不申歟も難計候へとも自然不都合之譯に御座候は、長崎より急に薩州へ一書にても河野着之上差越候は、雙方政府之情實は通徹可仕と相考申候先は爲其差急草々頓首

三月廿六日

木戸準一郎

山田市之允様

三好軍太郎様大急ぎ

(山田市之允は山田顯義三好軍大郎は三好重臣)

二八 井上馨山縣有朋三浦梧樓宛書翰

明治四年三月廿六日

亂筆御推覽可被下候

先以

(井上は井上馨)

各兄御壯剛に御盡力と奉大賀候さて井上兄には頓に御歸藩と奉存候處一向御様子不相分時日及遷延申候間少々着手仕候乍然何も會計が本と相成候處此事之御相談を盡し候事不相成依る半途之上が半途と相成候事も不
少困り入申候于時薩州より過日御使者到着知事殿當廿六日御發し之由に付

(從二位は毛利敬親)

從二位様は些御不快に被爲在候間

(知事は毛利元徳)

知事様來月四日御發途東京へは凡一同に御上着之御都合に御座候處四五日來

從二位様御不快病勢も相加わり一統舉る御按じ申上候所詮今日之御様子に
るは來月四日頃御快氣之御目途不被相窺
知事様にも御氣遣被游不得止御看病願被仰立今暫御上京之儀御猶餘御願
相成申候何卒一日も速に御全快に被爲至候様只々奉祈念候
一 九州邊之事も巨細之情實不相分候得ども少々は着手相成候由當春山

(西郷は西郷隆盛)

口藩より御願相成申候昨年來九州邊之取締一向不相立諸藩も盡く
朝廷を蔑如し御布令も反古同様に相成終に其患害
輦下にも及ひ申候に付斷然山口藩丈け任を相盡し候之御主意に候處終に
不被及御沙汰其も必竟薩藩よりも建言有之此藩おもに九州出兵之事も被
申立西郷などよりも直に承知仕候事も御座候處過日來日田出先より如別
帛報知有之已に西郷歸藩後も三十日に相成申候處如何之次第哉と
知事様始舉る遺憾に存申候全體此度之處は薩藩踏入盡力相成候行が、り
に隨る三藩と申事にも相成申候處今日之姿に、は却る四方之疑を來し
朝令之不相立處を顯し候譯に、屢如此買われ候歎賣られ候歎重大之事齟
齬仕候、は前途之事思ひ遣られ血泣之外無之此頃知事殿西郷始上着相成
候は、御專任被仰付左候て驥尾に隨ひ奴隸之心得に、指呼に隨ひ候は、
必四方之疑も相解け

朝廷も重く相成可申候如此尾大に、は天地之道理におゐて順理之譯無御

座候見聞之有様不取敢御報申置候

一 筑前之一條如何御評決に相成候哉最前薩藩之行がゝりどもに遅滞に不は彌以不相濟と煩念仕候

一 御國も都合相變り候事無之滿城之俗論よりは不相替吠へすくめられ申候必竟今日之祿を萬世へ相傳へ度之一念と被察申候先は任此便一書相呈申候其中時下御自玉第一に奉存候草々頓首

三月廿六日

世外

素狂 三兄御内披

梧樓

鐵面

(世外は井上馨素狂は山縣有朋梧樓は三浦梧

二九 西島青浦藤井八十衛三輪惣兵衛等宛書翰

明治四年四月三日

此度

(依二位は毛利敬親)

從二位様御薨去上下一統之悲慟不大方東京在留之面々も承知仕候上は驚愕悲歎と實に想像いたし候さて留守中も都合無別條事と存候乍去出立後彼是四十日に至り候得ども留守中より一符安否之書狀不到來如何之次第歟と相考へ申候是よりは數度書狀相送り要用之書狀も頼越候處只々片便に不一向様子不相分候に付如何哉と甚懸念いたし候且又出立前岩倉卿より之御送物一條も八十衛へも入々申置候處其後御飛脚も度々歸り候得ども早晚も不相達不始末至極と存候ケ様之次第故留守中之事も如何と按じ申候誰よりに不も便次第返答有之度候爲其差急草々不

四月三日

孝允

青浦殿

八十衛殿

惣兵衛殿

寅二郎殿内用

(青浦は西島青浦八十衛は藤井八十衛惣兵衛は三輪惣兵衛)

三〇 大久保利通宛書翰

明治四年四月五日

(從二位は毛利敬親)

(知事は毛利元徳)

(知事は島津忠義)

先以 御壯榮に引つゝき御盡誠爲 邦家奉大賀候さては於東京も委細申上置候通此度は是非從二位東上仕候心得に用意罷在候内兎角持病等も相起り尤も梅雨前後難澁仕候間暫御猶餘も相願候は 聞召候義に御坐候へは知事拜趨仕候心得に御坐候處御舊藩よりも態と御使御來入委曲御様子も相窺候に付當月早々知事發途之心得に罷在候處去月廿日頃より從二位病氣益増長終に黃泉之人と相成一統甚當惑罷在申候付は知事拜趨仕候事も不相叶此際別る遺憾之至に御坐候へとも如何とも難仕當秋は知事も朝集之定期に御坐候間忌明仕候は早々發途之用意可仕候不得止之次第に御坐候得共不都合至極薄命之仕合と奉存候不日知事公には御東着被爲游候御事と奉遙察候彌天下方向之一定仕朝威之相立候も此期と奉存上候間乍此上御盡忠奉仰願候先は爲其一書捧

呈仕度如此御坐候恐々頓首拜

四月五日

(西郷は西郷隆盛)

尙々九州地方之事巨細之情實等承知不仕候へ共懸隔仕候譯歟西郷先生より直々相窺候邊と自然齟齬之様成行緩嚴は兎も角も只々條理上を押し爲前途何も皇國之興起を目的に聊御奉公申度所存に御沙汰通九州へも出兵仕候處只今日之姿に於は九州邊之光景長州之私論に於むやみに朝廷へ奉迫候歟にも相響候様子隨而疑惑仕候もの不少よし定而何歟行違候事と奉存候へ共有之儘承知仕候邊無御隔意申上候間齟齬邊は御聞捨奉願候拜

(甲東は大久保利通)

甲東老盟臺内拜呈

允

三一 御堀耕助宛書翰

明治四年四月十一日

(野村は野村河野は進河野龜之)

先以御病氣も大分御折合馬關まで御歸着之由承知大に安心仕候乍去長々之御不快に付毫も御無理之無之様御隨意に被成申上事も乍疎世上之事は更に御かまひ無之氣長に御保養專一之御事に奉存候御不自由之事も御座候は、野村河野より無御用赦被仰越可被下候先は御見舞旁一書奉呈候草々頓首

四月十一日夜

允

(春江は御堀耕助)

春江 老兄御直

三二 石田英吉宛書翰

明治四年四月十八日

爾後御壯榮御盡力奉大賀候近來は打絶御地之御様子も相窺不申如何之光景に御座候哉兎角天下之事も議論如山必竟誓不疑之目的相立候上は千軍萬馬之中を一貫仕候覺悟相定り不申は進歩之程も無覺束歟と愚考仕候乍去是又言は易く此境に至るは難く實に百憂之至に御座候御地御近情

と御高按之邊も奉窺度奉存候さて又先達は御堀耕助事御地に滞在不形御高配を蒙り候由此度同人より承知仕候誠に難有奉存候同人も此節甚危険に衰弱は次第に相加り甚煩念存候先は任便一書奉呈候其中時下御自玉第一に奉存候草々頓首

四月十八日

尙々千々萬々乍失敬別紙御家來より相届き候様奉願候拜

石田 先生御内拆

木戸 允

(石田は石田英吉)

三三 南野一郎宛書翰

明治四年四月十九日

亂筆高許

昨日は御光來何之風情も無御坐候今日彌出足此雨にて余りにうるさく候間御尋不申候いづれ萩山口之間に御目にかかり可申候兼御願申置候一幅相とどき候は、態飛脚にもよろしく早々御送り被下候様御頼仕候

彼是月末までは萩に滞り可申候其節値も御聞せ可被下候相當之公説可有之候間何も可然御仕候早々頓首

四月十九日

鏡面

(無隣庵は南野一郎)

無隣庵御住持御直

三四 杉孫七郎宛書翰

明治四年四月廿五日

大亂筆高恕乍失敬諸彦へ可然御致意奉願候

朶雲奉拜見候先以御清榮に引つゝき御盡誠奉大賀候弟も過日馬關行之折晝夜駕籠に急き其より脳部に痛みを起し今以困却仕候然し昨今は大分快く覺へ申候芳野持參之別冊取寫始建白書慎に落手仕候逐々御承知も可被爲成弟も於馬關九州之近況い細承知解兵等之始末實に不届千萬千萬巡察使も職掌相立不申候薩之いつも尻口不合には困り入候次第巡察使も再度之西下にあ色を揚げ申候去乍是非とも此後之始末薩藩にも出兵等引

(芳野は芳野親義)

受決局相着き不申候はいよく

朝威は相立不申候九州之事も馬關邊にあ承り候處にあは全長州より相迫り候あ相起り薩州等は異論之様に響涉り益人心之方向も相立不申候如此次第に候得は最前長州建言通り被仰付候へは立派に所致は着け可申之處残念千萬此事に御座候

(山縣は山縣彌八) (久保は久保三)

老兄軍事へ御苦勞之由重疊奉存候山縣久保之處も治り相着大に安心仕候實に民政之處へ今一層屹度御手を不被着あは必後日不容易大患出來可仕と奉存候過日來人足其外ども之口氣を相考へ候に是まで不都合も不少中には不堪聞事而已に御座候今日まで之譯にあは民間之事は藩廳へはしれ兼申候どぶぞ此處は御工夫無之あは不相濟と奉存候布令懸りも被行結構之譯に御座候是又萩山口而已に無之諸部署へも同様之に御布令御示諭相成布令懸り之下へ筆者なりとも五六人も被差置人民之心得と可相成事は行渡り候様寫させ候あ御廻し被相成候方可然と奉存候弟も兩三日中には出

萩無間歸山仕直に尙又何も可申上候過日相呈し置候一書御覽被下候哉何
候間卒老兄にも今一應は暫御東上被成候都合可然と奉存候左候へは本末貫通
爾後むだ骨折可被少と愚考仕候兔の道

知事様にも當秋はは、御東上可被遊候間其御供は是非とも柏村翁へ被仰
付老兄には御交代之御都合可然と奉存候鳳翔丸馬關へ御廻し相成候由實
(知事は毛利元徳)に御堀も可憐次第不堪見候華浦へ歸り度が一念故何卒穩に參られかしと

只々祈り居申候先は御答旁奉呈候今以御病氣御平癒に不至よし嘸々御難
(御堀は御堀耕助)儀と御察申上候鳥渡御出萩は相叶不申哉御端書之御示し之次第更に御懸
念に不及候決る陳腐之策無之至る處新鮮に出逢候勢故食滯を恐れ何も近
寄せ不申候御降慮可被下候草々頓首拜復

四月廿五日

鏡面生

(猿村は杉孫七郎)

猿村 老兄内拜復

三五 杉孫七郎宛書翰

明治四年四月廿六日

(山根は山根秀輔)

(四條は四條隆調)

亂筆高怒過日於常六御内話申候等之儀可成丈け寛容之方可然且又姓名之不知分いか様にもせわいたし可被賜候賞
采雲拜見仕候過來御歸山之由引つゞき御盡誠と遙賀仕候山根よりの返事
に御坐候へは一人も不洩様いたし度兵士等之情においては堂々たる高踏の土もちがひ斟酌不仕るは不相成尙御
慥に落掌いたし候別に相變り候事無之已に於馬關御嘶申上候通三藩并伏
高案可然御盡力は祈候拜水之兵も頓に解散只四條巡察使而已長崎に滞在折角之好機を相失し再度
之西下も少しく色を揚げ候姿に實に遺憾至極に御座候何分にも此形に
亦は不相濟決末之御措置は屹度從

朝廷御指揮無之亦不相成薩兵之進退齟齬彼是此度之解兵等にて全九州之
御所致も長州之讒奏にて不得止一通り御着手に相成候様響涉り諸藩之方
向も却る迷惑いたし候歟と懸念仕候さては御堀もいまた華浦に得歸り不
申候由乍去昨天氣も穩に被相考申候間いかゞ哉と存候只華浦へ歸り度
が一念故何卒穩に歸浦相成かすと只々祈念いたし弟も過日之早駕に頭
痛を起し候後今以平癒に至り兼深溪に亦偷閑保養仕候不日歸山仕候間何

も其節拜話と申縮候日田飛脚一條彼是不一方御手数と奉存候先は爲其草々頓首

四月廿六日深溪にて認

糸米生

(峩那古蘇は杉孫七郎)

(峩那古蘇は金古曾にて杉孫七郎の住せし邑名なり)

峩那古蘇兄拜復

三六 吉富簡一宛書翰

明治四年五月四日

亂筆御推讀

(世外は井上馨)

數通之御書翰一時に落掌拜見仕候彌御清剛に御勉勵と御察申候鴻城も老公御大變に付實に上下之悲歎不大形困惑此事に御坐候于時先達る世外歸鴻不容易盡力根本たる會計等も漸目的相立誠に力を得申候只恨らくは今少し速に歸鴻いたし吳候へは於弟も別る仕合候處是又致し方無之兔に角前途之目的も漸相立申候さて御留守にも御一統御無事之由御安心々々

逐々於東京之御實行も傳承いたし誠に敬服いたし白銀一條之如きは御一生中御手際之一廉と相考へ申候所詮如是美なるものは大都會にも尤稀なる譯に御坐候間たとへ人々いか様之焼餅を以相妨候とも御頓着無之様有之度是より致祈念候于時又世外之迅速中々以允人之企及ぶ所に無之頃日承り候へは頓に馬關より曾る小若黨兼帯に連歩き候一物連を晝夜得意大悦之趣弟は只々指を喰へ恰乞食之人之美食を羨むに不異聊不平之心生せざるを得不得次第御才略を以歸京之上は尻を屹度つねられ候丈けには御一策御施し有之度此段内密御注進申候先は任幸便一書相呈候其中時下御自玉第一に存申候いつれ弟等も不日上京何も余は面上と申殘候三浦も頃日出足行違ひ終に得々々々不得面會遺憾至極に御坐候爲其草々頓首

(三浦は三浦梧樓)

五月四日

鏡面生

(矢原は吉富簡一)

矢原 兄御密披

(矢原は村名にして吉富簡一の住せる所なり)

木戸孝九文書卷十一 (明治四年五月)

三七 北川清助宛書翰

明治四年五月七日

亂筆高恕

爾後彌御清榮御精勤と奉察候さては御堀耕助も如御承知長々之不快しか
々々無御座候昨今尤危険弟等も如何哉と日々痛按仕居申候不憐は當人も
不治之病たるを察し候歟養生之事も甚懸念いたし候由に何卒先生之御
二男様を御所望いたし度由弟等も有限親友之事にも御座候間相叶候事に
御座候へはどふぞ存生中に安心爲致度と奉存候に付勿卒書中を以相窺候
は甚不敬之事と奉存候へ共昨今寸暇無之其とて閑等に難打過候間不取敢
此段御願申上候御聞濟相成候事に御座候は、何卒迅速御許諾被仰付候へ
は於弟も別難有奉存候いづれ參上可申上候得ども一應^{書中}を以申上候間御
内答偏に奉願候先は爲其草々頓首

五月七日

(清介は北川清助)

尙々本文願之趣相叶候儀に御座候は、偏に御許諾奉願候乍不及何事も
弟御周旋申上候間決る別に御配慮之儀は無御座と奉存候以上

清介 先生御直披

孝 允

三八 山縣彌八宛書翰

明治四年五月七日

亂筆高恕

(小奥は奥平謙輔)
(末吉は内垣末吉)
(中谷は中谷市左衛門)
(大中は大中作右衛門)
(次右衛門は片山次右衛門)

爾後御起居如何昨夜小奥來泊候に付及一戦争申候乍去客之事に付會釋之
心持を以相あつかひ置申候末吉なるものも弊寓へ滞留いたし居申候今日
御間無御座候は、御旅宿へ罷出度中谷大中等を被召呼候は如何哉此段
相窺申候弟は他を廻り夕刻に參上仕候間萬々一御故障有之候は、御家來
より次右衛門まで被仰聞置可被遣候此段御願仕候草々頓首

五月七日

尙々中谷を是非小天容易に退治候様申傍り候間中大中谷之處御一聲奉

木戸孝元文書卷十一 (明治四年五月)

二百二十九

願候拜

(山縣は山縣彌八)

山縣 老兄内密御直拆

木戸 孝允

三九 大田要藏宛書翰

明治四年五月十日

(耕助は御堀耕助)

彌御清適奉大賀候耕助様御不快御出來不來出脱カも御座候由嘸々御案と御察仕候さては北川清介二男御所望被成度御様子に御耕助様より御傳言有之且老臺にも御同意之由承知仕候間願わくは速に相運ひ片時も早々御安堵にいたし度と一昨日い曲北川の飛脚を以一書申越候處昨日態々出山二男金八當年十一歳に御一向未何事も相辨へ不申且耕助様御志を繼述仕候事も無覺束に付却る心痛仕候趣至る謙遜之挨拶御座候間只御父子様御心入之邊申陳候處終に任御所望候段返答に相成申候付は此段不取敢申上置候間何卒耕助様にも折を以御嘶可被成候先は爲其草々頓首

五月十日

準 一郎

要 藏 様御直拆

(要藏は大田要藏にて御堀耕助の父なり)

四〇 伊勢華宛書翰

明治四年五月十一日

亂筆高恕

一書啓呈仕候先以此度之御兇變實に痛哭悲泣之至嘸々御驚歎と遙察申候折角從東京御召も御座候處豈圖此度之御次第誠に内外之不幸不容易事と遺憾至極に奉存候さて逐々朶雲御投與一々相達拜誦仕候早速御答可申上之處四月上旬には必御歸省之由承知仕候に付於鴻城緩々拜青可仕と相樂罷在申候處一向御様子不相分其中此御大變に付候は早々右之御都合も有之御歸藩被爲成候と奉存御待申上候得共于今何たる御沙汰も無之甚殘念に奉存候へ共此節は不得拜青東上仕候實に如當年大不幸之事は無之感慨に堪へ不申候尤於東京は斷然逐々御着手も相成候由於于此は一入不屈不撓貫徹仕候様御配慮無之は前途之處も甚無覺束と奉存候先は馬關之池良罷越不

日御地へも罷出候様申候に付任幸便奉呈候其中時下御自玉第一に奉存候
草々頓首

五月十一日

(池良は池田良助)

尙々池良事肥之論に付歎願仕度主意も御座候由一通承知仕候處に
仕法立次第可然事歟とも奉存候弟よりも申上置吳候様相頼候に付其儘
申上候相應之事に御座候は、御採用可被下候爲其草々拜

(小湊は伊勢華)

小湊 老 臺御直披

孝 允

四一 伊藤博文宛書翰

明治四年五月廿四日

(大隈は大隈重信井上は井上馨)

彌今朝より出發仕候過日來御嘶申候事件に付默考いたし候處折角不審之
廉細目に至り候は不可何れ御歸京後尙得と御談可致候御序に大隈井上
兩氏などへも可然御致意是願候兎に角御用濟次第迅速御東上御待仕候草
々頓首

五月念四認置

允

(芳梅は伊藤博文)

芳 梅 兄御内披

四二 佐々木高行宛書翰

明治四年五月廿九日

朶雲奉拜見候先以御壯榮引續き不一方御盡誠と奉察上候弟も不圖の不幸
等に遭遇仕歸京の程も意外に遷延仕候如貴諭別冊は拜見仕候て大久保氏
へ相廻し可申候何れ拜眉の上萬申縮候早々拜復

五月念九

木 戸

(佐々木は佐々木高行)

佐々木老臺

四三 野村靖宛書翰

明治四年五月廿九日

先以御清安大賀々々さては長田より被頼候比氏傳説兄より御渡し相成候
分一讀いたし候處比氏佛國公使たりしとき宇國より被呼返候頃まで之事

(長田は長田銚太郎)

木戸孝允文書卷十一 (明治四年五月)

二百三十三

に比氏其後之大功は一向相見へ不申候自然別冊御坐候は、御廻し被下
度爲其得貴意申候草々頓首

五月廿九日

孝 允

(靖は野村
靖)

靖 兄御内々

四四 柏村信宛書翰

明治四年五月

(杉は杉孫
七郎)

本書申上候通杉氏も東行いづれ一決之模様早速御左右仕候事と奉存候間
其中藩廳大屬東行之儀先御見合相成居候様奉願候事

(此書は宛名署名及び月日を闕く明治四年
五月木戸孝允が柏村信に贈りしものなり)

四五 河北俊弼宛書翰

明治四年六月二日

新聞有之候は、御聞せ可被遣候

亂筆御推覽可被下候南貞助豊原百太郎へも差急切迫に
付巨細は得申こし候事出来不申候に付可然奉願候以上

(野村は野
村素介藤井
は藤井勉
三)
(有地は有
地品之允)
(三條は三
條實美)

爾後彌御壯榮に御勉勵と奉賀候本朝之近況も逐々渡海人より御承知可被
成此度野村藤井渡海に付候は尙則今之形勢も御嘶可仕候有地へ御托し
之朶雲慥に落掌拜誦仕候早晚も御至誠之程奉感佩候御書翰其ま、三條公
へ差上げ申候條公にも御熟覽被成大に御安堵之御様子奉窺候土薩之一條
は先々御降念可被成候如御高諭此危急之際兄弟之爭鬪終に一家之沈没に
至り申候去とて不良を企候ものは元より斷乎と所致不仕は不相濟候得
ども御一新前後同志兄弟之如きもの抑相鬪候は實に前途之進歩へは大
關係仕候に付其邊之儀は弟等も精々盡力乍不及仕候さて此度豚兒正二郎
と申もの英國へ差越申候實に眞之豚兒に其上病身ものに御座候得共先
年來少々愚按も有之英學爲仕候處先達之豊原百太郎一建罷越候節之人數
へ被相加洋行之御沙汰相成候得共病氣に少々相後れ此節野村藤井一同
差越申候間何卒盟兄丸に御引受け被成遣豊原へもよろしく被仰聞生立仕
聊なりとも國家之御用に相立候様御策鞭奉願候且從來之支那學等無用之

處を骨折候には不及と奉存候得共大略 本朝之事も承知いたし且々手紙
 之往復位は出来不申るは後々甚差間申候間留學中餘暇には日本字も爲學
 度當人へも得と申聞け置申候間是又懶惰之節は嚴敷御叱り可被遣候申上
 度事も御座候へ共出帆兩三日之間有之候と相考候處只今横濱より電信機
 にて俄に明日飛脚船出帆之由申越候間大狼狽御願まで眞之一書奉呈候其
 中時下別御自玉第一に奉存候○河瀬は頃日は歸朝歟と相待申候
 德世子公吉敷、宇部兩舊大夫へもよろしく様御致意奉願候品川始へも一書差越候含
 に御座候得共萬一此度之間に合不申候は、御序之節可然奉願候○御堀も
 終に去月十三日黄泉之客と相成申候
 老君上之御凶變は已に御承知可被成事と奉存候實に如當年大不幸之年は
 無之悲歎鬱悶難申上盡御想察可被下候盟兄始諸友中も御驚歎之事而已と
 御察申候先は爲其草々頓首

六月二日

(河瀬は河瀬眞孝)
 (德世子は德山侯世子)
 (毛利元功)
 (吉敷舊大夫は毛利親直)
 (宇部舊大夫は福原芳山)
 (品川は品川彌二郎)
 (御堀は御堀耕助)
 (老君上は毛利敬親)

尙々正二郎事浪華病院蘭醫の診察相頼候處常にレ一フルタランとヨシ
 ムホツタース等を相用ひ不申るは往々之爲甚不宜様申候別紙藥法書持
 出之申候間萬端よろしく御駈け引奉願候拜

義二郎盟兄御直拆

準一郎

(義二郎は河北義次郎)
 (後河北後彌)

四六 伊藤博文宛書翰

明治四年六月十一日頃

北海道爲開拓御雇に相成候米人も不日來着之よし其上に開拓之順序方
 略等も相立可申候へ共兎に角巨萬之金を費し不申るは所詮其成功も無覺
 束其他天下百之事一として金費にかゝはらざるはなし然るに大隈且は兄
 等之御説逐々承知仕候處にても別に安着了解仕候ほど之義承知不仕定
 御繰卷と歟申事に御運轉之御深算も可有之候へ共於于此は七八千萬又
 は一億萬位之國債と申もの歟金札と申もの歟御施行に相成此機會に乘し
 諸藩之銀札も盡於朝廷御引替之御手段相立候様有之度此上之處は御處致

(大隈は大隈重信)

次第に於たとへ億餘の國債出來候とも後害は有之間敷乍去是等は兄等々御責不能贅言候於于此是非諸省へは各委任之權を與へ十分其責めに當らせ度實に此機會不可失と甚氣がもめ申候大隈登庸之一條紛紜之議論如山中には大藩など拒訴候様之ものも有之内實案外之事不少此度は是非々々諸論を排し一愕爲致候積りに御坐候乍去西之方にも随分甚いとひ候氣味有之困迫仕候是は弟任して相擢き度と奉存候何卒兄にも議論は人に尋ねて人を教ゆる様な御趣向に御工夫被成何卒百之事務進歩いたし候處を御勘考是願候半は聾盲世界之有様實に文明州之譯に參り不申候此意味禿筆に難盡佛前之說法に候得共任筆申進候頓首

(此書は宛名署名及び月日を關し明治四年六月十一日頃木戸孝允が伊藤博文に贈れるものなり)

四七 榎村正直宛書翰

明治四年六月十三日

亂筆高恕

過日は朶雲御投與拜見仕候彌御清榮に引つゝき御盡力奉賀候弟等も無異御放意可被下候

一 外國人云々不日御評決に可相成と奉存候誠に極密之儀に御坐候へ共開市之事は如何に可有之哉自然御六つヶ敷御見込に御坐候得ば洛外地に於伏水邊に於も便宜之處へ御開に相成候は、往々京地之一繁昌歟と相考へ申候此儀は老兄限りに於必々御黙按之上御見込之邊後便に被仰越可被下候

此節御地人情不詳候得共爲前途愚按之極密申上候其御含に御承知可被下候

一 學文所之入費は種々大隈とも相論し見候得共難被申盡當り障り等も有之甚難澁に難被行其故學費と不申府中別廉之入費を以御取償之御計らひ有之候は、又どふ歟都合も出來可申歟尙御按じ之上承知いたし度候一 國重一條も歸京後早速岩卿へも得と相論じ申候處いづれ東西兩京同様之都合にいたし府中より華族の世話も不致は難相届に付不日詮儀相濟次第國重之事も其次第に於相運可申候今少々半途之件有之申候

(大隈は大隈重信)

(國重は國重正文)
(岩卿は岩倉具視)

一 新聞御贈り被下實に感服仕候然處東京よりも五部程送吳候様と歎之御事に御坐候處元來新聞之新聞たる所以は其地方而已之事に無之遠く邊境までも行渡り外國人も逐々求候様に無之は其益少く付るは已後京都之新聞も東京浪華等へも一々流布候様御世話有之度東京に於ては折角御世話可仕と存先日被差越候新聞も當地之新聞局へ相廻し書林へも示し候様申聞け置候過日はより申上候も東京之新聞西京へ流布候様御世話御頼申候譯に於て纔四五部位に於て只官員之見候位に於ては開化之益甚少候間御地書林へに於ても御申聞け出板毎に凡幾百冊と歎申様に約定いたし置度事に御座候浪華之方乍御面倒御心配相叶候へは別々仕合申候何分にも大阪府之因循には困り果申候京都之新聞も何卒山口藩へも初發より之分數百枚御送り有之度此段東京藩邸へも相談し置御國へ申越候様申聞け置候書林より諸方へも毎々仕送り候仕法爲相立度事に御坐候

一 木屋丁家宅一條之引當にして別包御送り申候間よろしく奉願候少々

損し候處も有之候と歎何も可然奉願候御多務中甚奉恐入候

一 乍失敬下緒代國重へ相送り申候間御とゞけ可被遣候不底に候は、早々申越候様御致意奉願候木梨信一西京へ立寄候様申居候自然御逢御坐候は、近情御聞取可被下候其中時下御自玉第一奉存候草々頓首

六月十三日

尙々藤村氏へも可然御致意是願候別に書狀出し不申候以上

十八眞老兄内密御獨披 糸 米

(藤村は藤村四郎一紫期)
(十八眞は横村正直)

四八 井上馨宛書翰 明治四年六月十六日

(江藤は江藤新平)
(春畝は伊藤博文)
(杉山は杉山孝敏)

昨朝は御光來奉謝候其後如何之御都合に御座候哉窺度奉存候さて又別冊は今朝江藤持參に於て同人申分には老兄春畝御一見之御都合に御座候處別に草稿とても無之則此冊元本之事故杉山に於ても御寫させ被下候而老兄まで差出吳候様被相頼申候然處杉山も繁多に於て聊寸暇有之候とも炎熱中之

事にも有之申候間格別御手間無之譯にも有之間敷と奉存候間御覽相濟候は、早々江藤へ御直に御返與奉願候且又江藤云くに余程世間へ相秘し候様にとの御内諭に付小史どもと讒兩三名引除取調候事に御座候間御疎は有之間敷候得ども老兄に亦も春畝に亦も公然素人へ御議論有之候亦別冊御示し等儀は深く御含み置被下御用捨奉願度との事に此段得と申上置吳候様にと被相託候間其まゝ申上候草々頓首

六月十六日夜

官中休所におゐて認

本文に江藤へ直に御返しと申上候得共弟へ一應御返し可被遣候

(湯田は井上馨)

湯田老兄御内披

糸米

(湯田となしたるは井上馨の舊宅ありし邑なりなほ木戸孝允自ら糸米と書せるに同じ)

四九 檳村正直宛書翰

明治四年六月十七日

今日御書翰到來仕候未一々得と拜見仕候間合無御座山城國中へ無洩御達に相成候鐵道云々書面拜見誠に感伏仕候付何卒山城國中に無之厚く天下四方へ御くばり有之たとへ御管轄外に亦も有志もの相加り候ものも可有之且は開化之一端とも相成其益不少事と奉存候何分にも浪華邊より迅速に四方へ相達し候様御方略有之度奉存候頓首

六月十七日

允

(十八眞は檳村正直)

十八眞兄御密拆

五〇 河北一宛書翰

明治四年六月十九日

御手昏拜見仕候彌御清榮奉賀候さては御風呂敷之内三包忠正公御遺物體に奉拜戴候付亦は態々御持登被下誠に難有奉存候いづれ拜青御禮可申上候へとも一應之御請まで草々頓首拜復

六月十九日

孝允

(忠正公は毛利敬親)

〔河北〕

一 様拜復

五一 岩倉具視宛書翰

明治四年六月廿二日

尊書奉敬誦候先以

御壯榮に被爲渡奉恐賀候さては津和野藩一條三職方思召通別に愚按申上候儀無御座乍去別藩とも違ひ公廨諸務を始前途之所置も行届候儀に付如命召

御前御直勅之節厚く被

仰聞候歟亦是御書付に亦も其御振合を以被下候歟元より臣子之情有望而廢藩之事奉建言候底意は有之間敷候得共比他藩候亦は一藩之會計等も十分相立居候處只管朝廷前途之事を以御爲を相考一途至誠より申出候儀に付聊御忠情は御表し被爲成候方百藩御誘導之一端とも奉存申上置候事に御座候更に違存無

御座候間早々御發令奉仰候頓首九拜

六月廿二日

再白過日來不快に而曠職之段奉恐入候敬白

奉復

孝 允拜白

(此書は明治四年木戸孝允が岩倉具視に贈れるものなり)

五二 伊藤博文宛書翰

明治四年六月廿三日

大亂毫御推覽可被下候以上

御出發前御多事之央今朝は態と御光來奉謝候兎角いつでも御長滯と相成候に付五日之御用は三日に相濟せ五日之御用へ七日之御私用相添はぬ様奉祈候益前には御歸り之程吳々も御待仕候○御頼仕置居候御役宅拜借之邊遠藤氏へ被仰置可被下候行かゝり違論有之候亦は不面白候○別紙乍失敬京都榎村へ御とゞけ奉願候彼は嚴重に勉強いたし大村などゝも相交り

(遠藤は遠藤謹助)
(榎村は榎村正直)

開化之都合も大略相辨へ世話仕候處兎角讒口にも時々困窮仕候由自然好
き御折も御坐候は御助力且御示諭奉祈候京都之固陋癡論等を破り候に付
る世上之誹謗は可有之乍去實事之擧りし事こそ第一と奉存候

(井上は井上馨)

○井上氏へ別に書狀不出候間傳言御頼仕候邊よろしく奉願候

(孝助は木戸孝助)

○千萬奉恐入候得ども孝助へ御命し被下候よろしく籐むしろ別紙之寸
法之分爲相調早々送り吳候様被仰聞可被遣候御歸便之間に合候得ば別
仕合申候よろしく奉願候先は御頼旁奉呈候其中時下御用心肝要に奉存候
草々頓首

六月廿三日

(正二郎は木戸正次郎)

尙々正二郎之事も遠藤へ御晰可被遣候山田市へも東京之兵部之情實等
も得と御晰し被成候方可然と奉存候弟よりも傳言之邊奉願候拜

芳梅 兄御内拆

允

(山田市は山田市之九顯義)

五三 尖戸磯宛書翰

明治四年六月廿三日

先以御清適奉大賀候過日來少々不快に御無沙汰申上候さては此度私同
行いたし候一連中に新庄七之丞と申もの御坐候處探索等には随分相長し
是まで直横目も相勤め居申候工部省よりも相望み申候得ども自然御省中
に御入用之邊ども御座候へは別々適任と奉存候に付一應此段申上試候否
御一答奉願候草々頓首拜

六月廿三日

木戸

(尖戸は尖戸磯)

尖戸 様御直披

五四 楨村正直宛書翰

明治四年六月廿四日

尙々當年之炎熱には困却此事に御座候貴地は如何別包御手数ながら國
重へ御渡し奉願候先使申上不圖失念仕候下緒之代金に御坐候藤村國
重へも可然奉願候相片付候は、國重論も運ひ可申遣存居申候

(藤村は藤村紫朗)
(國重は國重正文)

木戸孝九文書卷十一 (明治四年六月)

二百四十七

爾後彌御清剛珍重此事に御坐候さては家一條色々御配慮を懸け何とも恐入申候此節磯野小右衛門より代金相拂置候段申越候に付い細返答仕置候間過日差出置候分御渡し可被遣余之分は又是より相送り可申候弟も覺へ違ひ二百金臺と相考へ先便彼員數丈け差出申候且又千萬恐入候得共難波常二郎家雜作之事申越候現場之模様不相分候間何卒老兄御見計らひ被成差向候儀御取替置奉願候左候は、早速御返濟可仕候御多務中何とも不相濟次第に御座候

○奈良之先生何歟彌確證と相成候事御坐候は、ヶ條被仰越被下度一手段いたし見度相考へ申候

(廣澤は廣澤兵助)

○爰元も此節制度論彼是にゐどさくさ而已いたし居候○廣澤一條とふ歟手がゝり出來申候實に案外之事にゐ眞之賊歟と被察申候今少し半途故相分り次第早々東京府より申上候様可致候乍去浮浪等爾後未中々油斷不相成事情有之申候先は爲其任幸便奉呈候草々頓首

六月廿四日

允拜

(十八眞は横村正直)

十八 眞 兄極密

五五 井上馨宛書翰

明治四年六月廿五日

(大隈は大隈重信)

今日御嘶之末種々難澁出來つゝまる所早晚弟之迷惑に御座候得共クローツヒーツ一向運轉變化之道も相止まり大隈よりも種々内論有之必竟一應今日之運之上は早速卿補等とも同議を盡し弟従前見込之通り盡力も可有之由に付不得止此間暫時之御請も可仕と無余儀相答鐵面皮至極不平之至に御座候如何に好人物とは乍申獨り桶ぶせに逢ひ候形にゐ困却此事に御座候何分にも此余之運ひ方第一に付に付甘く相調候様得と大隈へも御談し置被下且又弟之暫時と申事も吳々大隈受合居候事に付此上隙取ごたゝ致し候ゐは弟も罪人と相成候外致し方無之厚く御推察可被下候此度は余り世間之論高く相成候と事之成就甚六つヶ敷候間其工合肝要と奉存候尙

(西郷は西郷隆盛)
(芳梅は伊藤博文)

彼書面も逐々諸氏之氣付を書集め一冊といたし候主意に西郷始へも得と相示し且議論もいたし見度候間必々芳梅之處より出候と申事は極々世上へ御秘し置可被下候右之書面にも小得失は有之候得共其邊は又如何とも相成可申芳梅之名出候と甚不工合不少候に付吳々も此處は御内々に奉願候先は爲其草々頓首

六月念五

彼制度書冊は直に弟之方へ御返し奉願候

(狙撃樓は井上馨)

狙撃樓先生御内密御火中

允

此手帑は杉之人を以差出し申候

五六 河北一宛書翰

明治四年六月廿七日

今日朶雲御投與被成下候處參

朝仕急に御用出來奔走いたし漸只今歸宿仕候處右之御都合に甚奉恐入

候重^替御用之節は被仰越可被下候萬一丸々上之御用に相成候得は弟も早

速^替變り之馬車探索可仕候に付自然も其御模様^替に御座候へは暫御猶餘^替奉願

候尤御用之節は朝被仰下候へは早速差出可申候尤其節は馬車馬御繫せ可

被下候弟も日々參

朝仕候に付早速探索可仕候^替間御用に御座候は、暫御猶餘^替之邊先生御舎に

あよろしく奉願候草々頓首

六月廿七日

尙々明日は米公使參

朝仕候に付願はくは相用ひ度乍去自然上に御積りも被爲在候へは又々

被仰越可被遣候早々以上

一 先 生拜復

孝 允

1) 河北

五七 大久保利通宛書翰

明治四年六月廿七日

(安藤は安藤就高)

安藤之處先刻大佑との御嘶に御坐候處租稅寮には大佑と申官名無御坐いかゝ仕候て可然哉御示し可被遣候草々頓首

廿七日

孝 允

(大藏卿は大久保利通)

大藏 卿殿御内々

五八 吉富簡一宛書翰

明治四年六月廿八日カ

昨夜は懇々御手紙何も拜顔ならては盡不申候今日は是非罷越度尤米人參朝故二字三字之間位にも相成可申歟と相考へ申候狐うなきと歟は申候は則吉富向に候白八茶屋にゐは無御坐候哉左候ゐは甚乍失禮困却いたしたし歟饑藝者之折節飯を食ひに行處歟と傳聞仕居候尙處彼是委敷御示し可被下候頓首

(樂水は吉富簡一)

樂水 兄御内々

允

(此書は月日を闕く明治四年六月廿八日に贈れるもの、如し)

五九 井上馨宛書翰

明治四年七月三日

(福原は福原恭輔)

今日公事にゐ頓と第一之私事を打忘申候先日先拜借相願候竹田額菊助と歟申もの、方へいつ頃出來候歟聞合せ候處一向承知不仕何卒眞に拜借御願仕度奉存候○且又時山繁平一條福原因循にゐ一向相分り不申何と歟御決定相願度奉存候草々頓首

七月三日

允

(世外は井上馨)

世外 老兄御直披

六〇 大久保利通宛書翰

明治四年七月十日

(西郷は西郷隆盛)

拜見仕候今以西郷先生御參 朝無之類に御待申上候處にゐ御坐候如何仕候ゐ可然哉相窺申候頓首拜

十日

允

(大久保は通)

大久保老臺

六一 伊藤博文宛書翰

明治四年七月十二日

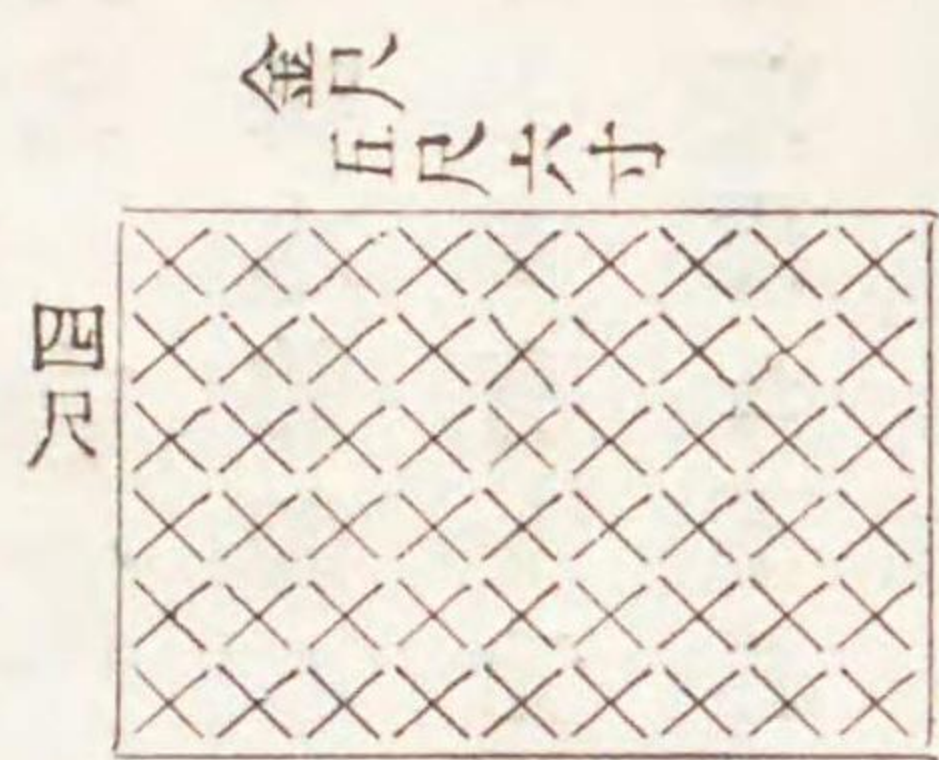
亂筆高恕吳々も速に御歸り御待申候本文之事件も目に至り候ては不如意事而已に御坐候得共兎に角大綱之舉候を目的に差急申候大綱舉り候は、隨之細目は相運候事も可有之とこらへ候以上

爾後彌御壯榮大賀此事に御坐候さては御一新以來之宿志不圖之機會に而稍相達候運に立至不顧微力頻に盡力聊成功を相樂申候付は御引受之關係益至大何卒片時も可成丈け速に御東歸御待仕候于時過る九日猛烈之風雨人家其外莫大之破損怪我人等も不少よし山田大丞八日に揚碇歸坂いたし候由に付不堪懸念早速聞合候處今以様子不相分如何哉と深案いたし申候先は爲其得貴意申候其中時下御自玉第一に存候草々頓首

(山田は山田顯義)

七月十二日

尙々頃日は餘程冷氣相催申候御地如何さて毎夜御面倒之義恐入候得共



如此簾むしる御注文被下度最上之分よろしく寢臺之下へ張り候積りに御坐候早速御東歸之運に至り候は、誰かへ御託し置奉願候毎々御繁務之中へ種々之事申出相濟不申候御容赦可被下候以上

(芳梅は伊藤博文)

芳梅 兄御内密

允

六二 内海忠勝宛書翰

明治四年七月十九日

爾後御清榮珍重此事に御座候過日御來訪之節も取紛緩々御嘶不得仕且又少年一條に付候も早速御報可致之處半途之行が、り而已に而判然難致

水戸孝九文書卷十一 (明治四年七月)

二百五十五

(山尾は山尾庸三)

一先山尾へ相頼候處に決着いたし候彼是に不都合而已に御座候御容赦可被下候さては千萬乍御面倒別昏英國コンシユル館へ早々相達候様御配意可被下候先は御頼旁取急草々頓首

七月十九日

尙々月末頃までには出港いたし度相考申候其節は御世話に相成可申と奉存候以上

内海 兄要用急

木戸允

(内海は内海忠勝)

六三 吉富簡一宛書翰

明治四年七月二十日

昨夜は御來訪御心切之程毎々不淺忝存申候然る處縷々御嘶之一條意外と云もあまり有り元より毫も意に挟むなど、申事は無之候得ども必竟人間交際之輕薄之不心切より出來候事に却る如此事をぐたふ、申候も實に不愉快至極眞に丈夫之不顧事と存申候何も在人而不在我儀に付總る御捨

置可然と存申候人間功名之念誰も不免ものに候へども余り勃々仕候と自然人間交際之輕薄に相成交際之不心切に相成候は當然之理に決る不足恠如弟は老屈之いたす所勃々之念不及人浮世之有様も聊推知又酸辛も聊相なめ平生所望只々今日を相避け度と而已之念に御坐候常に少壯有志之世の用に當り候様には只管希望する處に而世話中に兎角世話過之事も有之是又人之役目とは兼る相考候得共弟一之兄弟なく一之子兒なく人之兄弟人之子兒を見候も不知々々多情之氣味有之其俊才は別る相助け度こゝろもちいたし未一人も其坊けをなし候覺は無之依る又格別人も亦不疑然るに如此新話人も何も怨みはいたし不申候得共浮世之有様は不得不歎付るは何卒此事は御構ひ無之御打捨可然思へは思ふほど馬鹿々々敷事に御坐候先年來も別る才能ある人は世之廢物と相ならず各其志を遂げさせ度と紛紜之間種々之嫌疑に觸れ又種々之心配いたし同志間丈けに而は大安心いたし居候處諺に手飼之ものに手をかぶらるゝと歎浮世之有様

また人心中之危険はかり知られざるものにて只己を慎み候外いたし方無
之たとへ此上如何様破裂候とも山が崩れ候とも少しも不足驚吳々も彼一
條御捨置自然に御任せ可然と存申候爲其草々頓首

七月二十日朝

鏡 面

(樂水は吉
富簡一)

樂 水 兄御直

六四 吉富簡一宛書翰 明治四年七月三十日

爾後御遠々敷御暮如何逐々四方之報告を得候には兄御保全之道不相立御
令息漸々御病症相加わり至る危険之よし承知乍陰甚御氣遣仕候早晚兄之
御指揮故無余儀苦戦之地へのみ被相向他よりも御氣の毒に存申候何卒此
度は兼之對御苦勞候も御看病御疎無之様有之度奉祈候さて又薄々承
り候へは兼清明日御約束之よし彼等は約束を堅固に相守り居候様被察申
候付るは御趣向之邊相窺度存候草々頓首

七月卅日

允

(樂水は吉
富簡一)

樂 水 兄御内披

六五 伊藤博文宛書翰 明治四年八月三日

過日一書差出候處相達申候哉爾後彌御清榮に御奉職と珍重奉存候さては
當地之處も大略之目途は且々相舉候得共一省々々之事に至り候は總而
不如意事而已に甚煩念いたし候尤大藏などは民部之事務大概相合し實
に前途之處も別々不容易事と竊に相考申候然るに今日之有様筆頭に難盡
事而已井上も實に心配とは相察せられ申候逐々御傳承も有之候事と御察申候兄には御歸京も些御延引歟之由
承知仕候處何分にも此際之事に付弟之懇願に御任何卒一日も速に一應御
歸京奉待候大隈とも相談し候此段不取敢得貴意申候先は爲其草々頓首

八月三日

尙々吳々も迅速御歸京御待仕候以上

木戸孝允文書卷十一 (明治四年八月)

(大隈は大
隈重信)

(芳梅は伊藤博文)

木戸孝允文書卷十一 (明治四年八月)

芳梅 兄御内密

二百六十

允

六六 伊藤博文宛書翰

明治四年八月四日

(大隈は大隈重信)

過日呈一書置候處又種々之議論出來是非暫兄には御滞坂無之は御地之御用等も不相捌との事に終に其處に相決し候過日申上候も少々大隈等と相謀り候事も御坐候へ共右之次第故一應此段入御耳置候此間之紛紜難盡筆頭いづれ拜青之期と申縮候草々頓首

八月四日

芳梅 兄御直

允

(芳梅は伊藤博文)

六七 平原平右衛門等宛書翰

明治四年八月四日

爾後彌無事と珍重に存候さては七月期限之返納金今以何たる一左右も無之於此方も役外之儀に不一方心配のみいたし其上不都合之次第不少候

元來昨年其方へ其等之事も厚く及談判候處決る無相違邊幾應にも相受け合且其方之事に付候は種々心志を勞し世話もいたし候事に付約束相違等之事は必有之間敷と相考候處已に昨年來もいかほどの心配相懸け候歟始終齟齬の事ばかりに御座候必竟其方よりも入々内情吐露相頼候事に付どふかいたし候可遣と相考却る至今日候は皆此方之心痛とのみ相成申候何卒早々返納可有之候且又此方私金三千六百金も相預け置候處外國行もいたし度候間利金には不及候間差繰候前金一同に返金有之候様いたし度無相違其計らひ可有之候度々違却候は無限之困窮に候間吳々も齟齬不致様にと存候尙又公金二萬兩之分も其方今日之心底に有は此方へも奉對

朝廷候も別金とも違ひ不容易之心配爲其心を痛め候事不少今日までも昨年より之違約故難申盡之心痛此往き之處も深く苦心候間何卒當中には皆々返納有之候様いたし度其方之申候處是まで信實と相心得且證文に

木戸孝允文書卷十一 (明治四年八月)

二百六十一

も何時にも御用は不相欠との事も有之候に付大切之品を相托し候處前後數度之齟齬歎息之事而已に御坐候當年中には皆濟可有之候左候は、此方も少しは安心いたし聊保養にも相成可申候屹度本文之次第相違不致様にと存候草々以上

八月四日

尙々幾應にも間違有之候は不相濟候所持之品悉皆相拂候とも此始抹相立候様可有心配多用之中此懸け合而已にも難澁至極に候偏に其方之言を信し何卒世話いたし遣し度心配いたし其上にも如此又心痛を懸け候は於其方如何なる事歟と存申候世間へも成丈け内々之邊も申聞け置候處こと々々其方より口外いたし依は尙更不都合に付早々返濟無之は不相濟候間本文之通決無相違様心配可有之候以上

(平右衛門
は平原平右
衛門)

平右衛門ドノ

常 太 郎ドノ用内大急

キ

ド

六八 北川清助宛書翰

明治四年八月四日

亂筆御推覽被成下御序に御一答奉願候

爾後彌御清適に引つゝき御盡力と奉大賀候歸山中は不相變御懇切に被成遣御高情不淺奉萬謝候出立前は何歟取紛緩々御嘶も不得仕甚残念に奉存候さては先年來由緒も有之平原平右衛門事出京後私方へも度々罷越出精方之儀に付候も種々懇願いたし候に付可相成はどふぞ世話いたし遣し度と存心切よりして多用之中不一方心配もいたし遣し尤往々之約束等を嚴重に申し聞幾應も承服之上益相願候事に付世話仕候處直に昨年來度々之違約不始末等不少私も心痛之上に役外之心痛を生じ彼へ之心切も至今日候は不一方心配と相成恩を離にいたし候様之次第不届至極と被存候此上違約有之候は不相濟と相考此度別紙態々申越候に付千萬失敬至極御多事之中奉恐入候得ども父子之間被召呼早々遂心配相濟せ候様被仰聞

可被遣候此段奉願候先は右御願旁奉呈候其中時下御白玉第一に奉存候草々頓首

八月四日

尙々東京へ相應之御用御坐候は、被仰越可被下候今日は薩土之御親兵なども余程出京いたし居申候山口より被差出候御親兵尤上等之様被相考申候此上は此度之御發令に付候は皇國中之兵隊も一樣に歸し可申と奉存候乍失敬御序之せつ重見へも可然御致意奉願候以上

(清介は北川清助)

清介 様御内披

準一郎

六九 井上勝宛書翰 明治四年八月十三日

(山尾は山尾庸三)

過日は彼是御世話相成奉謝候爾後彌御清榮と大賀此事に御座候さては山尾よりも先日來省中之一條御承知之事と奉存候付は於僕も甚御曲察之

儀も不少と相考候必竟今日之事總而不得當之儀而已に其責は政府に有之政府之責は則僕等に可有之元より其不都合も頓に落着仕居一日も速に要路之地も相避け度種々工夫も相盡し候得共未能遂其志誠に僕等今日之盛時に遭遇仕候も意外之至に或は今日或は今月と決死仕候事も不一度不計之世運に今日之場合に相趣き無學不智一々汗顔之事而已に御座候尤最前より此盛時を想察仕候へは學文之致し方も可有之候得共所詮一代には難及事と相考居申候一時御國之艱難天下之危難中々難盡筆頭之有様然るに今日之速なるに至り候は官省一々得其人候と申事誓六つヶ敷隨而不得止之行かゝりも有之難事之情實も不少此等之處則今日之有様に人々不如意は元より候古人逢其時候も尙不如意十に八九之語あり且兄之才識學力と僕等之愚按を以喋々口を開候は謂ゆる佛前說法不都合至極に御座候へ共舊誼を以御付合申候得ば兄之不入耳して爲兄に惜むことあり兄之意に不移して爲兄に悲むことあり兄之心になくし爲兄に憐む

ことあり僕今日之兄を不思して已往を想像し尙弟少之如く相考今更赤面
之至に御座候付は決り已來爲兄に舊誼を以開口は仕間敷尙乍此上御成
業之程奉祈候乍去一言申進置度則今見
皇國如歐洲ならざるは不待言此際自ら忠不忠之別あり義不義之別も可有
之と奉存候間御一顧被下度は願候已來は慎り舊誼を以交情は相戒可申候
草々頓首

八月十三日

孝 允

彌 吉 様御直拆

(彌吉は井
上彌吉後井
上勝)

七〇 品川彌二郎宛書翰

明治四年八月十三日

(老公は毛
利敬親)
(御堀は御
堀耕助)

爾後引つゝき御勉勵と大賀此事に御座候逐々朶雲御投與被下候處兎角取
紛一々御答も不得仕御容赦可被下候頓に御承知にも可有之老公上御薨去
次に御堀などの不幸不堪筆次第嘸々御痛歎と遙察致し候於弟等實に十方

に暗れ只管悲泣仕候而已に御座候且又兄御滯學之云々盡力いたし兄之名
當に相認め願書一通差出し置申候兵部之手を經不申は條理不相立候に
付其運にいたし置申候乍去長くは御六つヶ敷と相考候得共暫は御滯學も
相叶可申候十年之後は逐々人才も出可申に付其間困却いたし候事而已に
付何卒速に御歸朝を弟等は希望仕候さては逐々御傳承と奉存候改革事等
も頃日は余程相運大分無心置手も被出候實に御一新來は盡く敵と相成版
籍奉還論等に付は四方之怒りを受け四方之怨みを招き候得共今日之形
勢に於て前日之敵も味方と相成候もの不少近來薩州にも一入奮勵西郷兄
弟なども別々勉強内に於山縣野村等始精勤盡力感心之次第に御座候是に
於大勢御推察可被下候世之變遷も速なるものに御座候此上は大藩を分ち
薩は三つ長は二つ加州は三つと申よふに縣廳を立小藩は相合し大略小百
之縣廳位に於相濟せ度と内もくろみ仕居申候何事も人に致させ不申は
成就之工合不面白候此邊之苦情は御察し可被下候弟も此度之一幕相濟候

(西郷兄弟
は隆盛從
道)
(山縣は山
縣有朋野村
は野村靖)

は、相避け度と頻に渴望仕居申候近來尤衰弱氣力之消果申候乍去將來を
 推考候へは兎角あたまがちに開化を唱へ人情之日に輕薄に移り候は見苦
 敷友人にも亡友に及び候人甚稀少何分にも此邊之御苦配は兄等之御任と
 奉存候諸友へも別に書狀差出し不申候間御序に可然御致意奉願候先達豚
 兒正二郎龍動に差越申候定る河北之不一形世話に相成可申付るは別に一
 書差越申候尙青木にも數書狀之返答旁一書差送り申候間乍御手數御届け
 可被下候過日新聞紙差送り候るは如何と朋友中に噂仕居候處承り候へは
 野村より御送り申候由是は昨年申上置候弟思たち之新聞局に而是に而少
 々邊境にも都下之情實相通じ申候何歟日本之考とも相成候事は幸便之折
 御申越可被下候左候へは早速新聞局に差出申候兄河北青木等より參り候
 書翰或は圖面等も逐々備天覽申候○野村素介藤井勉三等も歐洲に罷越申
 候定る御尋可申候一書兩人にも差越度候得共周游之事故無覺束相考申候
 間不問安否候間萬一御逢有之候は、可然御致意奉願候青木も學業は相す

(正二郎は木戸正次郎)
 (河北は河
 北俊彌)
 (青木は青
 木周藏)
 (野村は野
 村靖)

すみ候由に御座候得共又自省不致るは當人は無心に而も自然往々爲國家
 に奉公いたし候誠心も難相達に付愚按之事は一筆申越候考に御座候得共
 御考之儀は無御腹臆御忠告も被成候様にと存候先日古澤迂郎より一書差
 越申候御便ども御座候は、可然御致聲可被下候先は積る御答旁相呈申候
 別る御自愛第一に奉存候草々頓首

(古澤迂郎
 は古澤滋)

八月十三日

鏡面生

扇洲契兄

(扇洲は品
 川彌二郎)

此書狀は彼是三十日ほど前に認置申候格別形勢相變候事も無之弟も病
 身故隨るこゝろも不面白所願は只管勇退に御座候然る所内に而はと安
 心に申上候處友人之情も難圖兎角人世如浮萍實に飽果申候始終弟も苦
 力引受け之因果か生涯心痛而已御推憐可被下候以上

七一 北川清助宛書翰

明治四年八月十五日

先以御清榮奉賀候さては平原平右衛門之違約不都合多事之中不容易心痛を懸け甚困却仕候先書を以い曲相願候通尙又催促申越候間乍御手数早々別帛御届け被遣弟心痛之邊も入々被仰聞早々返納いたし候様御一令奉願候先は爲其草々頓首

八月十五日

尙々時下御自玉第一に奉存候拜

清 介 様御直披

準 一郎

(清介は北川清助)

七二 伊藤博文宛書翰

明治四年八月十五日

亂筆御推讀直に御火中可被下候

過日は一書御投與拜見仕候彌御清適御奉職大賀此事に奉存候さては當地之光景も筆頭難盡事而已一日稍安堵候へは一日は又苦心之事も出來候様之有様に一喜一怒變幻自ら不知御降察可被下候乍去大體上においては

違却之事も有之間敷歟と相考候事も御坐候得共此間之損失は不少候只々今更喋々申陳候も如何に候得共元來此度改革之際任用も存分に無之のとは申處より大藏には兄を全權に申出候處其等之邊に付隱然種々議論往來一時難描光景と相成必竟國事上より起り候事に一私心より出る處に無之候間頓着なく相論し候不苦事に候へ共總之隱症と相成居種々苦心も仕見候へども不如意事尙十に八九古今同様に御坐候付は愚考に於は一先兎に角突然御歸京可然と相考度々得貴意候次第に御坐候處彼是隙取候中暫御滞坂に於廉々差かゝり居候事御盡力有之度との衆論も出來いづれ他日一模様も顯れ可申必竟其節之次第をも相謀り置不申はと此間之難盡紙筆蘇氏之父子を雖出不能如何先々今日之處に於落着いたし候依は何卒租稅兼造幣頭も御奉職被成置度此邊之處總之公私之情を盡し申上候委細は不遠拜青之上可申陳候先は此段得貴意申候草々頓首

八月十五日

木戸孝允文書卷十一 (明治四年八月)

二百七十一

(陸奥は陸奥宗光)

尙々陸奥も東着無間加奈川縣知事奉職いたし候籐むしろは慥に相とゞき御多事之中御手数何とも恐入申候拜

(芳梅は伊藤博文)

芳梅 兄御内披

鐵面生

七三 陸奥宗光宛書翰

明治四年八月廿日

朶雲御投與拜見仕候先以御壯榮に御奉職奉大賀候前之御縣は御一新以來未御一新を不知處に御坐候間百端御配慮と奉察候不日御出京之御様子弟も鳥渡出港仕度奉存候得共所詮三五日には六つヶ敷都合好に參り候而も廿五日にも相成可申歟是又屹度は難申上候其故無御容赦御出京奉待候且又寫眞態と御惠與奉謝候一見老兄之御周游を想像仕不堪羨思候何も尙拜青と申縮候草々頓首拜復

八月廿日

木 允

(陸奥は陸奥宗光)

陸奥 老兄御直拆

七四 井上馨宛書翰

明治四年八月廿一日

朶雲奉拜見候弟歎願一條も縷々御示し難有奉存候何卒可相成は御盡力乍此上奉願候弟も亦人故服も立ち残念も不少候處兎角一體之調和を謀り只々各之所長を以邦家に其力を爲入度と只管全體之事を顧慮仕候處始終何事も意外に而已相成浮世之常情とは乍申此有様にも飽果申候終に微意之達せし事も無之せめては山中隨意之思ひなりとも相遂げ度と奉存候芳梅一條如貴諭實に可憐之至必竟是等は今日之損益に相係り候事不少尙大隈(大隈は大隈重信)よりも承知可仕候同人も何卒泰山に登り天下を小と見候了簡に而世間之人を相交り候へは一層同人之主意も可相達候處兎角誰とも對候に相成候よりやケ間敷是又壯年銳氣之不得止事に御座候へ共事務上へ相響候様成行候には實に残念至極に御座候尙何も拜青可相窺候別に一二事御相談仕度も御座候間兎に角兩三日中に可期候草々頓首

八月廿一日

尙々馬車代奉畏候必老兄之方へ返上可仕候暫時御待ち可被下候決る長引は不仕候へとも少々都合御座候に付御合置可被遣候以上

(世外は井上馨)

世外 老兄内密拜復

允

七五 吉富簡一宛書翰

明治四年八月廿四日

(世外は井上馨)

(容堂は山内容堂)

御手紙拜見い曲致承知候さては一昨廿二日井上世外罷越候に付是非とも兄一應御歸國之事相談じ彼も終に折合申候乍去其に付弟も少々一論有之申候間昨日今日にも御話可申と相考候處容堂先生昨日より居つゞけに彼是取紛申候明朝御出がけ御立寄可被下候先は爲其草々頓首

八月念四夜半

木戸

(吉富は吉富簡一)

吉富 様御内々

七六 伊藤博文宛書翰

明治四年八月廿八日

亂筆御推讀奉頼候

過刻は御妨仕候縷々御内話申候一條は必四方八方何れへも御無言申も疎と奉存候必竟人世は四苦八苦古人之言宜也と相考申候そして此四苦八苦も亦決る又猥に難被洩も亦其中の一苦也依る他へは吳々も御用捨只々將來人民之爲に役人得手勝手之情實を以無限之患害を殘し置候は力之及ぶ丈けは防禦之方略相定居不申るは在職中は一日も不安事と愚考仕候余には別之一念も無之此邊御合置可被下候人情之輕薄も反覆も不珍今更喋々不申進候乍去弟も只御客にも女郎にも必竟調和不致るは其間之損費不易と數年間只管仲居之周旋役を勤め難忍を忍ひ今日まで一日も愉快と思ひ候事も無之消光仕候處最早此際は去而可也とも奉存候弟も亦人也折角兄に御一會申候は、此邊之御料理相願度と而已只々相樂み居申候何卒御工夫吳々も御願仕候尙委細御談も可致候得共前文之處は偏に御明籌奉仰

(舊知事は
毛利元徳)

(大隈は大
隈重信)

(芳梅は伊
藤博文)

候ちらと御嘶申候洋行も不相叶候へは暫西京住居にゐも仕度何卒心事御一察奉願候○舊知事公も弟と横濱同行いたし度との御意に付明早朝より出港仕候已に横濱行之許可は申受置候乍去いつでも幾日より出港候と申候へは何と歎かど歎故障出来候故俄に發足仕候間此段無御失念大隈はほとよく御斷置可被下候兄御出港如何兎に角梅莊に在蒲田十字頃まで見合可申候間御都合相成候は、御出浮御待仕候先は爲其御頼旁々草々頓首

八月念八夜

孝 允

芳 梅 兄内密御直披

七七 萬代利兵衛同甚七宛書翰

明治四年八月廿八日

殘暑之節に候所彌無事に御一家御揃珍重に存候當春歸山中は何歎と御世話に相成忝存候其後老人は如何に候哉逐々快方とは存候得共一向御様子承知不致候故案じ申候取紛書狀も得出し不申候當年は世上豊作故人氣も

一入穩なる由に相聞申候さては先年來逐々御頼み申置候金子差引等も座を立一帳面にし御送り可被下候乍手數其方にも通ひ之様にいたし一帳面に認置被下候へは算用等も見安く仕合申候間御面倒等は存候得共早々御取調可被下候先は爲其草々以上

八月廿八日

尙々御家内中へも可然御傳言可被下候以上

利 兵 へ 様

イト米

(利兵へ甚
七は萬代利
兵衛同甚
七)

甚 七 様内密用

七八 河北俊弼宛書翰

明治四年九月一日

先達一書相呈候處御一覽被下候哉爾後彌御清榮と御察申候豚兒も不形御世話を蒙り可申乍此上よろしく御教諭奉願候野村藤井なども緩々御面話いたし候事と遙察仕候近況は大略御承知と奉存候積年只管全國の力

(野村は野
村素介藤井
は藤井勉
三)

木戸孝九文書卷十一 (明治四年九月)

二百七十七

を以全國を保護不致るは所詮前途の目途も難相立と苦慮仕候處何分從來の風俗に強藩は強藩丈け割據論盛に或は薩長あつての朝廷など、實に前路の有様不堪杞憂より種々の方略を以御一新の折版籍奉還之議を起し漸盡力の廉殆徹貫薩長土肥建言と相成始る其名を朝廷におさめ候處此際内外とも危疑百端弟を不怨ものは則怒り四方の怨怒一身に集り元より必死を期し候得共又精々用心も仕不圖今日まで生存いたし候然る處爾來大勢も大に進歩し當春夏に至り候は大中小藩の内廢藩合縣或は一州一縣等種々建言候藩も不少今般終に今一改正に至り總る廢藩之發令被仰出候處格別驚き候ものも無之版籍奉還を謀りし時に比すれば人心の動搖意外に御座候必竟人智の進遷如此昔日怨怒いたせしものも今日は却る大に活眼今日を助けしものも不少必竟

皇國の大幸と竊に喜悅仕候乍去未暗殺等は油斷不相成候且開化に隨ひ人情友誼の輕薄等見るに不忍もの不少將來之處又一層の苦按を増し申候且

又

皇國未文明の不進よりして多くは人の形容を以人撰等いたし文武とも無學の人不少尤今日大歎息いたし候處に御座候第一にとぼしきものは只人才而已に御座候偶横文を解し外國の語に通するもの雖有之國を愛するの心薄く只管今日の利に而已相馳せ風俗を害し候事も不少候何卒々々兄等御勉勵被成速に御歸朝御盡力のほと萬禱いたし候弟も近來病身に而十分御奉公も無覺束一度渡海に而も相叶候得は無此上大幸と盡力も仕見候處中々六つヶ敷勇退いたし度と相考候得共其運不容易御憐察可被下候近來は薩州よりも西郷始逐々出仕爲

（西郷は西郷隆盛）

皇國結構なる事と相よろこひ候付は此後は世間の疑惑も自然と氷解封縣論なども自然と消滅隨而進歩も一入速に相成可申候尙此上は薩州加州又は長州等も別る三縣とも二縣とも不仕而其詮無之然るときは小藩は不得不合勢尤是等も詮議之上御發令の都合に御坐候是に而稍大目も相立申

候尤一時は天下の借財を朝廷へ被成候様のものなる其實とては少しも無御座候得共先會計も一に歸し兵制其外總一に歸し候上は十年後の處は措置を誤り不申候得は屹度大策は相立候事無疑と樂み申候先は任幸便得貴意申候其中時下別る御自愛第一に奉存候豚兒の義吳々も奉願候拜白

九月一日

孝 允

義次郎兄

(義次郎は河北義次郎後河北俊彌)

戊辰之歳癸丑甲寅戊午壬戌癸亥甲子之事などを思ひ出し世の中は櫻も月も泣り取一草も月日にむらはありり々わと口に信せて申せしことをまた思出し爲御一笑認申候

七九 伊藤博文宛書翰

明治四年九月六日

昨日は態々御光來不圖及夜分御歸途別る御迷惑と御察申候尙情推考仕候處心中を不盡事も不少可相成は明日參上今一應御相談仕度と奉存候さて

(竹内亡友は竹内正兵衛)

又過日御嘶申置候竹内亡友遺子正藏事造幣寮中に一勉強いたし度志之よしに先達來兄へ御願仕吳候様入々申出此度御歸京之御様子を承知仕候る出京仕候何卒御面會被下可相成事に御坐候は御世話御願仕候人物は至る直實之ものに御坐候間御受合申候草々頓首

九月六日

允

(芳梅は伊藤博文)

芳 梅 兄御内披

八〇 陸奥宗光宛書翰

明治四年九月七日

爾後彌御清榮に御精勤と遙察仕候折角之御出京に付今一日は御來泊と奉存候處勿卒御別申候まゝにて直に御歸港被成緩々御話も不得仕甚殘念に奉存候さて別符は過日青木より差越候に付則御送申上候先は爲其草々頓首

九月七日

允

(青木は青木周藏)

(陸奥は陸奥宗光)

陸奥老兄御直拆

八一 伊藤博文宛書翰

明治四年九月九日

大藏省創立規則書御明きに相成候は、今暫時拜借仕度過日來取紛全冊觀了不得仕候且又馬車之事御願仕置候通何卒乍御面倒近便に米國へ無御失念御注文奉願候先は爲其草々頓首

九月九日

允

(芳梅は伊藤博文)

芳梅兄御直拆

八二 松田道之宛書翰

明治四年九月九日

朶雲奉拜見候先以今度御壯榮に御上着奉賀候千萬隨意之儀申上候得ども明朝參朝前御光來被下候へは別々難有奉存候十字前には參

(大隈は大隈重信)

朝仕候故緩々相窺候事も不相叶歟とも奉存候へ共大略窺置候得ば尙大隈にも相謀り可申候先は爲其草々頓首拜復

重陽

木戸

(松田は松田道之)

松田先生拜復

八三 伊勢華宛書翰

明治四年九月十二日

朶雲御投與奉拜見候彌御清榮御奉職大賀此事に御座候近來は兎角取紛御無沙汰而已申上候逐々都下之近情も御承知可被成先年御滯京之折とも大に相違世間も余程進歩隨而萬事急かわ敷相成高雅風致之人にも得會し不申保養も出來兼申候御憐察可被下候さては專斷御咎一條取調へさせ申候處甚不都合至極正院之裁は三十五日之閉門に御座候處致達之誤に已に進退も窺出申候左様御承知可被下候先達るは藝州邊も何歟大分之混雜出來いたし候由定而煽動する之徒有之候事と被相察申候此上は第一に地

(青甫は西島青浦)

方之制置へ御着手相成大藩は二三縣にも分割相成候は、小藩は隨ち相合し可申候いづれ不日御出發にも相成可申祿制等之儀は抑末に而得と盡衆議良法を定め俄に困却不仕様に御所致有之度と奉存候且又廻米一條等之儀は如御高按昨年来も種々議論有之已に御改正に相成申候間當年は別に差間も有之間敷歟と相考申候終に税法は金納に一般相變り不申は往々不都合不少歟と奉存候青甫へ申聞け新聞雜誌御送申候様托し置候間御一覽可被下候横濱新聞にも至る新話有之申候何卒縣地へは不絶新分類御取寄に相成人民にも御示し相成逐々は自ら求め候様相成候は、其益も不少歟と奉存候先は乍忽卒一書奉呈候其中時下御自玉第一に奉存候草々頓首

九月十二日

尙々御揮畫拜見仕候別に今以御上達とも不被窺候得共自ら都下畫工之及ばざる所日々拜見相樂難有奉存候尙又御序に御令聞へもよろしく御致知奉願候拜

(小松は伊勢華)

小松 老臺

松 菊生

八四 南貞助宛書翰

明治四年九月十二日

先達は朶雲御投與拜見仕候爾後御壯剛に引つゝき御勉強と奉察候皇國內も一向相變候事無之次第に進歩いたし候間御安心可被成候弟も近來は敵視せられ候事もこゝろからか少しは薄らき候様覺申候是に而御察可被下候野村素介藤井勉三等歐行に付は其まで之様子は細同人どもより巨細御承知と相考申候豚兒も其節英國へ遣し河北へも尙相頼越置申候定ち不容易御世話にも相成可申候實に幼年之上弱質に御坐候間如何いたし居候哉と按じ申候頓に御承知にも相成可申此度廢藩爲縣之御沙汰一發舊知事は總ち被免候然るに一向怪ものも少く兩三年前之事を以相考候は同様今日之人かく知見之異なるもの歟と存候知見は逐々相開け候へども何分にも無學文盲之世界に而只人才之饑饉には困却仕候先は任幸便一

(河北は河

書相呈候其内時下御自玉第一に奉存候草々頓首

九月十二日

木戸孝允

南 貞助兄

八五 井上馨宛書翰

明治四年九月十四日

亂筆高恕本文云々御内々に御含置可被遣候

先以御清榮奉大賀候昨夜は深更御妨仕毎々御心思を煩し甚恐縮仕候兎角
弟も時事想像不覺塞胸實に快然之日も無御坐候處昨夜も段々今日之有様
を承知いたし他之有志人も苦痛仕候邊相察し真心不安前途を泣考無限之
感慨相發し今日も終日顧回仕候處過慮より屢御耳を惱し如何にも不相濟
事と奉存候御容赦是祈候云ゆる弟之因縁因果御憐恕可被下候○新縣始抹
云々御嘶仕置候處板垣は必政府中へ局相起し候主意に亦も無之様相聞へ
申候何れに亦も往々之御都合を只願居候事に御坐候布政使一條に付亦は

(板垣は板垣退助)

一論有之候歟に被窺申候只是は御含までに申上置候尙い細は直々御嘶可
仕候爲其草々頓首

九月十四日

允

(世外は井上馨)

世外 老兄御内拆

八六 吉富簡一宛書翰

明治四年九月十四日

昨夜は是非々々參上可致と相考候處多務に亦不圖隙取漸十字頃推參候處
已に〳〵御散坐に亦何とも殘念に存候乍去必竟期に違ひ候故此段御斷申
候彌今日御出立に候哉鳥渡御様子承り度草々頓首

九月十四日

允

樂水 兄御内披

(樂水は吉富簡一)

八七 吉富簡一宛書翰

明治四年九月十五日

木戸孝允文書卷十一 (明治四年九月)

二百八十七

過日極内々に御嘶申候事を最早御口外被成候歟と懸念いたし候初より口外之事に候へは弟も左まで心痛も不致斷然決局論に及び候處是も人生之一大苦と相考弟知人之爲に不都合有之候とはと決る心戒いたし居處兄御口外被成候様に被相察弟之身上は兎も角も其人に對し不相濟實に不安存居申候依る此段御尋申候草々

九月十五日

允

(樂水は吉富簡一)

樂水 兄御内密

八八 井上馨宛書翰

明治四年九月十七日

(後藤は後藤象二郎) (河瀬は河瀬眞孝)

(前文缺) 工部大輔へ御運に相成候都合に御座候處大藏卿不承知に造幣寮之御用有之難被相趣趣條公へ縷々申出候由付るは後藤河瀬之處も隨而難動三調子不相揃るは却る紛紜を生し候歟とも相考申候何卒卿之處は老兄より案心に至り候様御示諭被成候るは如何無左るは此まゝに及遷延申候左候

(野靖は野村靖)

而河瀬此際俄之様に侍従長に而も被仰付候は、野靖等過日來之行が、りも承知いたし居已に一昨夜も罷越辯解いたし居候様之都合に付又種々之邪案を生し候歟も難圖此邊は御合置可被遣候元より爾後於弟別に疑念も無之乍去權之輕重失其宜候は實に御大事に而和漢西洋皆是より紛亂を相生じ是等元より不能申上候へ共誠に

君邊之處眞に至重之御事と奉存候故益こゝろを勞し申候此邊之處總而御合置乍陰御料理之邊も御盡力可被下候先は爲其草々頓首

九月十七日

(此書は宛名署名を闕く明治四年木戸孝允が井上馨に贈れるものなり)

八九 伊藤博文宛書翰

明治四年九月十九日

亂筆高恕大久之處は是非其方よろし參議に御坐候へは司法も大藏も聞申候今日専務に大藏と申候るも實は六十之手習歸り候上もまた十

(大久は大久保利通)

木戸孝允文書卷十一 (明治四年九月)

二百八十九

分に自分に相務め候様な了簡にあらは入り入申候御勸味奉願候

(岩卿は岩倉具視)

過日に悪路態々御光來奉謝候さては昨日岩卿へ内々兄を御招に此度外

(條公は三條實美)

國行之云々も御相談被成度申出置候處如何之御都合候哉今日岩公より條

(板垣は板垣退助)

公へ被申出板垣へ先御談し其より西郷へも御談し有之候由此處順序を失未

(西郷は西郷隆盛)

慥かなる事は承知不仕候へ共勸考之上可申上との事に大違論も無之歟

(山は山口尚芳)

のよし一兩日には何と歟相決し可申候只々成就を祈居申候さて相決候上

(山は山口尚芳)

は岩大山弟と四人兄は申までも無之候處兎に角兄には大藏之御専務有之

(山は山口尚芳)

山口は定る司法之御用可有之乍去五人合して過日承り候通一圓之使節と

(山は山口尚芳)

相成不申あらは不都合而已と愚考仕候然し大久保と弟は別に大藏の司法の

(山は山口尚芳)

と不申其中へ被組込大久も元は參議職に罷越候方都合可然歟と奉存候

(山は山口尚芳)

且又後日之爲にも斯く相成居候方萬々よろしく様相考申候此段兄には如

(山は山口尚芳)

何被思食候哉御同意に候は、何卒兄より岩卿へも此段得と被仰込置候様

(山は山口尚芳)

仕度奉存候依る不取敢申上候草々頓首

九月十九日夜

允

芳梅 兄御内拆

(芳梅は伊藤博文)

九〇 吉富簡一宛書翰

明治四年九月十九日

御都合次第御光來有之候もよろしく候尤終日出朝退出直に客來つゝぎ

に真面談は少々弱り候方に御坐候乍去兄之御心事不安事に御坐候も元

(井上は井上馨)

より何時に承知にて候やはり少々は齟齬も可有之歟決る井上一人之

申候と申事は有之間敷兄僕をなだむる所に地を換へ候て兄も御工夫有之

候は如何事柄を不知して申陳候もいかゝに候へども不取敢此段入御耳

申候草々頓首

九月十九日

允

樂水 兄御内々

(樂水は吉富簡一)

九一 河瀬眞孝宛書翰

明治四年九月十九日

朶雲拜見仕候弟も此度之御様子俄に承知仕候處如何之御事に候哉と相考
飽まで根を押推問申上候處意味深長實に於弟も御尤千萬と相考實は世間
之公論におゐても老兄を推し候よしに付不及是非乍去此際は何卒一御勉
勵被成下度奉願候い細は筆頭に難盡候間拜青之上萬可申上候決御懸念
之事も無御座候間可相成は明日御出仕相成候へは無此上と奉存候得ども
御不案心に被爲在候は、明日之處は御見合に相成候もよろしく御座候
へ共此度之事は老兄御まぬかれかたき譯にゐ乍恐
至尊前路之御事を御案じ申上候に付るは誠に無余儀御次第に付何卒於弟
も無御顧念御出仕奉願候先は一應之御答まで草々頓首拜復

九月十九日

允

(河瀬は河瀬眞孝)

河瀬老兄内拜復

亂筆御推覽可被下候

九二 河瀬眞孝宛書翰

明治四年九月廿七日

亂筆高恕

朶雲拜見仕候折角御光來被下候由之處折惡外出中にゐ失敬仕且甚殘念に
奉存候さては此度御轉任之一條弟も其出處は巨細に存不申候得共先達來
頻に

君邊之人御任撰も有之且其上後來は凡各國之大勢も知食されずはと云
々御評議も有之候末過日大臣公始同列中よりも預相談其上如何とも難仕
場合に付於弟も別に違論相發し候様も無之尙御内話仕候一條も有之實に
不得止事と奉存候處老兄御内意之邊も有之嘸御當惑にも可有之と御察し
仕暫時之御休憩は御無理ならず奉存居候乍去尙又兩三日中には參上可仕
と奉存候處御誠意い細承知仕於弟も只々涕泣之外無之候餘は拜青萬可申
陳候江川一條不圖及延引御氣之毒に奉存候十日前ほどに迎ひ差遣し申候

(大臣は太政大臣三條實美右大臣岩倉具視)

間不日めて度出京と相待申候預御書翰候へは最早難陰に付申上候實は爲念一應懸御目候計らひ仕置申候乍去此儀は如何可相成哉尙他日之模様に寄可申上候先は御請まで草々頓首

九月念七夜

尙々弟洋行も過半相決し必竟老兄方之御高意奉謝候乍去余り氣なり候と恐ろしき氣味も御座候間成丈けしらぬ顔仕居申候御笑察可被下候以上

河瀬 盟 兄内御答

允

(河瀬は河瀬貞孝)

九三 三浦芳介宛書翰

明治四年九月三十日

度々御光來被下忝奉存候さては切迫に洋行一條御申被成候得とも實に使節之處は凡從者も定限有之其上使節御同行にゐは只一時耳目を樂しめ候而已にゐ決る學文之益も無之却る後來之爲にも不相成事と奉存候間使節

(山田は山田顯義)

御同行之事は御とまり被成候方可然と存申候尤兵部之方どもに都合相成候へは無此上事と相考今日も山田の態と申越置候依る此段一應申進置候也

九月卅日夜

尙々此度會計は總人數を引受け一人罷越候事と相考申候今朝御出之節二百兩や三百兩之事ならば被申立も候得共(以下欠)

三 浦 兄御直

允

(三浦は三浦芳介)

九四 吉富簡一宛書翰

明治四年九月下旬

附 同人より木戸孝允宛裏書答書

御面書拜見實に三日已前より如山如海苦辛已に昨日も心は矢たけに存候へ共消入ばかり之苦心にゐ不圖よわり果申候故心底に不任次第に候何卒明日は是非々々参り度候乍去同行多くては不面白候別に邪摩人少く候て

下り懸けより参り度行先等旁御聞せ可被下候先は爲其草々頓首

尚々如弟ものは早晚も獨り迷惑而已いたし甚苦み申候世外などの智略に及び不申御憐察々々

松菊先生御直披御火中

樂 拜兄

(樂兄は樂水兄にて吉富簡一)

(此書は月日を闕く明治四年九月下旬木戸孝允が吉富簡一の招きに答へたるものなり)

九五 六戸磯宛書翰 明治四年十月十一日

(晴湖は奥原晴湖) (青甫は西島青浦)

先以御清榮奉賀候今日御倍席被仰付難有奉存候さては晴湖と彼松源婦來訪如御約束差出候も可然哉左候へは青甫に案内爲仕可申候自然御席上之御一興歎とも奉存候乍去御様子相窺御指揮奉願候無御容赦被仰聞可被遣候草々頓首拜

十月十一日

允

(敬字は六戸磯)

敬字先生御直拆

九六 西島青浦宛書翰 明治四年十月十二日

木ど留守行

(河瀬は河瀬真孝)

今日は三つめに付河瀬へなににてもつかわし候様にと存申候いわひのものに候へばもちにゐもさかなにてもよろしく候爲其草々頓首

十月十二日

尚々松にも今日か明日かせひ々々参り候よふにと存申候

(松は木戸孝允の妻松子)

(此書は宛名署名を闕く明治四年木戸孝允が西島青浦に贈れるものなり)

九七 大谷光尊宛書翰 明治四年十月十三日

(右大臣は岩倉具視)

謹啓未奉接警效候處先以御清榮法課御盛行奉南山候然は此度右大臣殿初め朝官數名航海巡歴相成事に付るは有志華族之向も同航出船も有之候に

木戸孝允文書卷十一 (明治四年十月)

二百九十七

付るは桑門中に亦も同様有御坐度奉存候幸に大座下此度之好機會に御奮興海外之形情親敷御目撃被爲成候は、後來殊格之御法華も相立可申委曲默雷より可申上候得とも御内獎之爲卒爾申上候斷然御決籌可被爲成候時下格別御保護奉萬禱候恐惶頓首敬白

十月十三日

尙々奉呈亂毫恐縮之至に御坐候拜白

龍谷山主大座下内覽

木戸 孝 允再拜

(龍谷山主は大谷光尊)

九八 吉富簡一宛書翰

明治四年十月十四日

(山尾は山尾庸三)
(井上は井上馨)

御手紙拜見昨夜は甚残念に御坐候御出立も相調兼候由何卒御滞留可被成山尾に亦も拙寓に亦もよろしく此段に構ひ候事無御坐候且又井上云々全同人之推了に亦可有之拙へも其様な口氣有之候得共一向に相應じ不申候尙御面會之上と申殘候實に甚御氣の毒千萬乍去公明正大御頓着無之様に

と是祈草々頓首

十四日夜

樂 水 兄内答

允

(樂水は吉富簡一)

九九 井上馨宛書翰

明治四年十月十五日

只今は御妨仕候弟も全時勢に曲け候而縷々申上候儀に亦は毛頭無之候得共情々前途を推考仕見候得は終に彼れ我理に隨ひ候ときは其道理を聞かざるを得之都合出來候に付只々其處を御論し申候強而老兄之御説を矯め候譯に亦は一向無御坐候得ども何分御聞入六つヶ敷必竟微意貫徹不仕殘憾に奉存候乍去尙御勘考可被下候いつれつゝまる處は二つに一つ只老兄而已此地官也を御去り被成候と申事は萬々六つヶ敷事に元より於弟も不安事に御坐候付亦は御勘考まで辭表御差出之處御見合被成候亦は如何何分之儀相窺度奉存候草々頓首

木戸孝允文書卷十一 (明治四年十月)

二百九十九

十五日

(世外は井上馨)

世外 老兄御内密

三百 允

一〇〇 河瀬眞孝宛書翰

明治四年十月十六日

(三浦五郎は三浦梧)

朶雲拜見仕候爾後兎角御無沙汰而已申上候實子何も大取紛御降察可被下候さては折角御光來を御願可仕と奉存候處頃日來始終どさくさ仕廿日日合よろしく候間可申上と存申候處三浦五郎方へ妻を迎へ是非々々參り吳候様との事に付さすれば廿三日之外よき日合無之余り延引になりいかゞ哉と申居り候處に御座候付は明十七日に御座候へは日合もよろしく候間御都合次第明夕御光來有之候は如何先は爲其御答申上候草々頓首

十月十六日

(條公は三條實美)

尙々今夕條公へ罷出不申は不相成儀有之申候今晚は内居仕候都合に御座候以上

(河瀬は河瀬眞孝)

河瀬 様御直

木戸

一〇一 井上馨宛書翰

明治四年十月十八日

(福地は福地源一郎) (大隈は大隈重信)

今朝は御妨申上候福地之平生は弟も一向存不申候得とも今日席上にて彼之主意承り候處に於て實に心切なる事に於て頼母敷ものと相考申候何卒老兄も股肱に如此ものは御置被成候方公私之御爲と奉存候に付直に大隈へも入々相論し置申候同人も異論は無之候得とも過日已に御達しには相成居候よし乍去其は兎も角も御とゞめに相成候方吳々可然と申置候於弟同行中如此心切に任し候もの有之候へは一事に於ても心強く存申候へ共内外無別之道理を以相考候ときは大藏省にも一兩人は如此もの居り不申候は御不爲歎と奉存候且左院之事は別にケ條書には無之候へ共官員増加之事に付候而嚴重之ケ條も有之第一左院は正院中之ものに御座候間大隈も氣遣なしと申候間任其せ置申候右院之處は兼之御見込通に相運申候先

は爲其草々頓首

十月十七日

世外 老兄御内密

(世外は井上馨)

允

一〇二 井上馨宛書翰

明治四年十月十九日

(福地は福地源二郎)
(大隈は大隈重信)
(伊藤は伊藤博文)
(大久保は大久保利通)
(上野は上野景範)

昨日は御答書拜見仕候福地論精々盡力大隈へも十分相論し置申候尤イ藤之論にも一道理有之候へども自ら軽重も有之候事に付是非残し置候都合に可仕と奉存候乍去今何と申譯には參り兼申候イ藤より大久保にも論じ可申大久保より老兄へ相示談申候事も可有之歟何卒御都合相成候は、薩生上野を此度御遣しに相成候は如何先は爲其大急申上候草々頓首

十月十九日

尙々佛語の出来候もの無之よしに、旁福地之處もやケ間敷申候別に御心當り之人ともは無御座哉一人は佛語之出来候人を連參り候方可然と

奉存候以上

世外 老兄極密

(世外は井上馨)

允

一〇三 榎村正直宛書翰

明治四年十月二十日

爾後彌御壯榮に引つゝき御盡力大賀至極に御座候さて先達は廉々御申越相成候別昏之趣早速爲取調申候處已に々々擧る相運候事之由に付早々御答にも及び不申候且又其後朶雲御投與態々銘茗御贈り被下甚以痛却仕候實は岡歸國之折御地へ立寄候由に付銚之茶壺老兄へ御頼仕置吳候様相托し候處甚以意外之至付は、何歟御報仕度何卒東京之産物早々御申越被下候へは殊更難有奉存候弟も今度不圖歐米へ副使之

(岡は岡守節)

(西本願寺上人は大谷光尊)
(黙雷は島地黙雷)

命を蒙り諸先生之援助を以一周可仕と御請申候いつれ來月十日頃には出發可仕候彼地にも相應御用も御坐候は、御申越可被下候東京も別に相變り候事も無之候〇過日西本願寺上人へ洋行之事内實は黙雷之議論に

木戸孝允文書卷十一 (明治四年十月)

三百三

弟も至極同意いたし候に付一書相投じ申候自然奮發候得は是亦今日之事と奉存候に付萬一御承知にも相成候は、御すゝめ可被下候先は爲其書相呈候其中時下御自玉第一に奉存候草々頓首

十月廿日

(國重は國重正文)

尙々當節尤多事國重へも心外之無音仕候間可然御致意是願候藤村へも御序之せつよろしく御傳言御頼仕候以上

(十八眞は横村正直)

十八眞老兄御直披

允

一〇四 吉富簡一宛書翰

明治四年十月廿二日

(山尾は山尾庸三)

爾後彌御清剛に御歸着と御察申候御一別後一書可差出と相考居候中日々意外に取紛一日々々と遷延候内山尾歸便に却る預御尋書忝奉存候其後一向都下之景況も相變り候事無之弟等も彌來月十日前後には出發之都合に相成幸にして世界之形勢を一見いたし候歸

朝之上は靉之泉水に異なる光景も御嘶申度乍去むやみに魂魄海外に相とどまり候は困り入申候間此段は前以御斷申置候さて又山尾其外より逐々傳承候へば於浪華始終彌次喜太八に類し候事而已にて余程東京歸り之精いを以少々ならず御盡力も有之候よし之處却る山口より之新上りよりも御不出來に漸にして木槿と歎椿と歎之花一枝御折被成候よし向來は何卒御愼可被成其に引かへ弟等は此度屹度歐米之間におゐて百萬之實行相顯れ終には彼等之抑留如何と其邊は聊懸念いたし候至于此候は元より三水などの云々は風塵之如くに相考へ申候以我規模之廣太御察し可被下候○御托し之詩書出たらめに舊作を揮ひ申候御一笑可被下候○さて先達る秋本源太郎有富源兵衛片山治右衛門などより酒造株云々に付歎願之主意に各より書帖差越申候是等は總る大藏省之詮議に付早速承り合せ見候處天下一般之事に甚六つヶ敷次第に御坐候乍然一時之問も可有之候に付其邊之儀は定る縣廳におゐて少々懸け引は有之可申と相考へ申

候諸老人にも何卒文明開化之有様御目撃之邊を御新話可被下候諸老人も東京へも一遊いたし候は、又可然歟とも相考申候然し弟等は少々開化未真に至らざる處には少々飽も参り却る山口之溪邊を思ひ出し候へ共兎に角一時は今日之様にあませくり不申るは前途之運も相立申間敷期定は十年之後と相察申候片山之教法論は随分面白く乍去十に不至歟後日ならては相分り申間敷候且又有富より器物投與今日報ゆるに物なし何歟東京之好物にも有之候は、兄之御熟知を以御序之節同人へ御示し被下青甫までなりとも御申越可被下候先は任幸便一書差出申候其中時下御自愛第一に存候頓首

(青甫は西島青浦)

(竹田は竹田庸伯)

(三浦は三浦梧樓)

(猿村は杉孫七郎)

(樂水は吉富簡一)

十月廿二日

尙々竹田其外へも可然御致意可被下候三浦も今日婚禮王子邊より出し申候至極別品御安意々々近況は猿村老人より御聞取可被下候以上

樂水 兄御内披

允

一〇五 高杉小忠太宛書翰

明治四年十月廿三日

爾後先以

(杉は杉孫七郎)

(河瀬安四郎は河瀬真孝)

(江川太郎左衛門娘はおせい)

御清適に御奉職奉大賀候さて過日は朶雲御投與被成下候處兎角取紛一々御答も不仕不敬之段御御容赦奉願候此度は杉氏歸省仕候間都下之近況御承知可被下候都合相變候事も無御座候于時此度米歐行之奉命仕不日出發可仕と奉存候付るは様子次第御令孫御事河瀬安四郎方へ家來之もの相添依托可申歟と奉存候河瀬之人柄等はい細御承知之通に且先達る江川太郎左衛門娘私養家と相成同人へ配偶爲仕夫も拙宅に滞留仕居是又人柄も至極穩に少々文字も有之申候間旁可然と奉存居申候必御煩念不被成下候様仕度尤近處之事に御座候間如何様とも便宜に随ひ相計らひ可申候尙杉氏よりも御承知可被遣候自然御内輪様旁思食も被爲在候へは來春に好時節に暫時御歸國相成候もよろしく此邊杉へも申傳置

候間萬無御容赦御示可被下候先達は少々疥癩に御難儀被成今日は御
全快に御座候間御安意可被成候先は爲其一書奉呈候時下別御自玉第一
に奉存候草々頓首

十月廿三日

尙々

御満堂様へも可然御致意奉願候拜

(高杉は高杉小忠大)

高杉老 臺御内拆

允

一〇六 大津四郎右衛門宛書翰

明治四年十月廿五日

(餅山は小幡高政)

近來大に御無沙汰仕候傳承いたし候へは少々之吐血に御引け御禁酒之よし實に御ひきよふ千萬と奉存候何卒今一層御奮發御飲破被成候は如何左候へは終に血も恐れ候る再ひ出ること不能此際實に大切なる興敗之機會と奉存候于時餅山も上着早速元之御留守様と相考へ美人とも集會先生

(久保は久保三)
(猿村は杉孫七郎)

も御地にゐは只々于此苦心仕候處府下にゐは取持手も不少何卒是も下より吐血に至り不申候へはよろしくと相考申候所詮阿松などはへちやと相成可申に付小御離間位は不苦久保翁も何歟無聊之趣恰伏龍之欲起之勢爾他近況は猿村老人より御承知可被下候金杯は後便に杉まで送り可申候度々調替へ不圖及延引申候今一御奮發之御一助とも相成可申候大取紛一書草々奉呈候頓首

十月廿五日

(正木は正木基介山縣八木梨は木梨信一吉田は吉田右一)

尙々弟も來月より世界めぐりと出かけ申候正木山縣木梨吉田等へ御集會吳々もよろしく此度書狀認候日合無之意外至極に御座候山縣も全快と遙察仕候以上

松屋先 生御直披

允

(松屋は大津四郎右衛門)

一〇七 渡邊昇宛書翰

明治四年十月廿五日

木戸孝九文書卷十一 (明治四年十月)

三百九

(刺賀は刺賀佐兵衛)

過日刺賀へ一書相托候處其後朶雲相達拜見仕候則今度上坂仕候間可然御
駈け引可被下候都下都合靜謐鐵道も品川へ相達申候いづれ今日宇内之形
勢を相察候ときは是非他日日月之旗章御艦にひらめき地球御一周位無之
るは所詮眞之興起には至り申間敷左候而對等之權も維持せられ東洋第一
之海軍も振起可仕徹底是に御着眼何卒瑣々たる得失を不相論乍此上進歩
之處御作興奉祈候然し人々多くは僥倖而已を心懸け自然輕燥浮薄之風近
來有之是等は乍殘念開化先生等之罪に己之務めに注意する所不足且は
は二十年來千辛萬苦之境を不顧只利是馳候處よりの弊も不少付るは學校
等之事尤今日之急務に於たとへ一藝一能に於るも眞に其學問出來候ときは
自然と沈實仕候ものに付天下一般之學則等も急々相立是等へ御着手專要
と奉存候今度之任幸便御答旁一書奉呈候弟も必來月上旬には揚碇可仕先
一年位は御離別隨分御自愛爲邦家奉祈候歸
朝之折は拭眼御地之進歩拜見可仕候草々頓首

十月廿五日

尙々外に今一事申上度事件は御座候へ共不得止申縮候□之處は尙よろ
しく奉願候拜

昇 先 生御直拆

允

(昇は渡邊昇)

一〇八 伊藤博文宛書翰

明治四年十月下旬

(岡山元知事は池田章政)
(石部は石部祿郎)
(大臣公は三條實美)

岡山元知事今日より出立岡山縣へ親之法事祖母之見舞旁罷越候由岡山參
事石部よりも却る罷越候方よろしきと申越候様子付るは近日御願可仕候
に付御許容有之候様大臣公へ被仰上可被下候
尋常之事に御座候得ども過日岡山縣紛紜之評判も有之且は因州之如き
不都合も候間爲念申上候也

(此書は宛名署名及び月日を闕く明治四年十月下旬木戸孝九が伊藤博文に贈れるものなり)

一〇九 伊藤博文宛書翰 明治四年十一月五日

過刻御嘶申置候八日人名之處何卒明日までに大略御付記し可被下候無左
亦は二重に相成候ものも可有之と相考申候いづれ百人位は可有之歟と奉
存候草々頓首

十一月五日

(田邊は田邊太一)

尙々田邊へ金一條も御談置可被下候兩條とも御半途之様に相考申候間
爲念申上候以上

(伊藤は伊藤博文)

伊藤工部大輔殿

木戸孝允

一一〇 檳村正直宛書翰 明治四年十一月五日

大取紛亂筆高許

御狀相達拜見仕候彌御清適に御盡職大賀此事に奉存候さては探索書態々
御送早速正院へ差出申候何分にも徹底御所致無之亦は所詮一掃仕候事無

覺束不日に春來之不良徒も御所致相決申候乍此上十分御盡誠奉祈候○木
屋家之事も嘸々御手数數と奉存候態々被仰越甚奉恐入候如何様とも兄思食
に可然御計らひ奉願候○不遠諸縣之官員等も一定可仕付るはいづれ差
引無之引足り不申候逐々動搖いたし候處も此度は其巨魁十分嚴罰不被
仰付るは將來之處も御駕御却可六ヶ敷と奉存候先は乍匆卒一書御答仕
候其中時下御自玉第一に奉存候草々頓首

十一月五日

允

(十八眞は檳村正直)

前 十八眞 兄拜復

一一一 檳村正直宛書翰 明治四年十一月七日

亂筆御推覽可被下候別番は過日認置申候分にも御座候過日御探索暗
過日杉孫七郎へ之符御披見被下候よしにも態々書籍御送り被下御高意
殺云々等い細承知仕名々へも申聞け候何卒是等之處へ相集めさせ候

木戸孝允文書卷十一 (明治四年十一月)

三百十三

之程奉萬謝候代金等も不相分甚迷惑仕候いつれ歸 朝之上積る御報可仕
一 一時に大獵いたし度ものに御座候一人二人位つゝにははかどり
候其まで御猶餘奉願候御廉書之ケ條は渡海之上早々承り合せ可申上候尤
不申候是非一二年間に膽に冷し候丈け之英斷無之は進歩も遅緩仕
國々に証儀仕見候へは少々は手間取候歟とも相考申候

候乍去又外國人にも過日ヘルギー公使等之如く無禮相働候ときは
○此度同行人數六七十も有之可申歟其中に女も五六人爲留學洋行仕候何
十分に御叱責有之度決る外國之交際如此譯には無之と奉存候

(鴻市は鴻池市兵衛)
(真崎は真崎秀郡カ)

卒御地よりも有志之ものにて留學にても心懸け候ものは被差越度奉存候
先達之西島青浦より鴻市へ一書相投じさせ彼之悴なども今便に被差越度
と相考候處一片之返答にも不及不束なる奴に御座候先達之東京よりサン
フランシスコ之展覽場へ真崎と申もの差越候處大に都合よろしく運賃其
外諸入用差引二割之利得有之候よし然處當時東京府も些按し過に却る

人民之誘導如何と相考候氣味も有之申候然し横濱之繁昌に出入等は日
々進歩はいたし申候真崎と申候もの自然元參事平岡兵吉巨細承知いたし
居候ものに付都合により御地へ差出候は如何と申聞け置候間萬一上京
仕候時機に至り候は、米國之近情等もい細御探御遣ひ被成候は、必西京
産物逐々繁盛之一端とも相成可申歟と奉存候先は爲其草々頓首

(十八眞は横村正直)

十一月七日
後 十八眞老兄内御答

一一二 門脇重綾宛

(木戸孝允伊藤博文)

連署書翰

明治四年十一月八日

彌御多祥被爲在奉賀候陳は今八日於東兩國中村樓龜酒差上度候間乍御苦
勞第二字より御來駕奉願上候右爲御案内如此に御座候草々以上

(門脇は門脇重綾)
(伊藤は伊藤博文)

十一月八日
門 脇 様

木戸孝允文書卷十一 (明治四年十一月)

木戸 伊藤 藤 様
三百十五

一一三 三條實美宛書翰 明治四年十一月十日

謹呈約定書拜見調印仕候尤廢藩置縣之御所致は當今之大急務に付速に内地之政務純一に相歸し候様無御間斷御着手千萬奉仰願候付は士之常職を被免隨而祿募等之處も適宜之御良法を以速に舊士族之安堵仕候様御所致有之度只内地之政務純一に歸せざる之基は三百萬之士族之御所致不定に有之申候付は被免常職被定祿募候が尤なる急務と歟奉存上候

(本願寺上人は大谷光尊)

一 本願寺上人事過日御内々申上候通先達一書相投し候處直様上京昨夜鳥渡面會仕候處中々凡僧とも被相窺不申候何卒御内諭にても被爲在候る速に洋行仕候方必前途之御都合歟と奉存候今日區々之世説に用捨仕候るは爲國にも爲人民にも相成不申此邊厚く御熟慮奉仰候尙い細は島地默雷參上仕候る言上仕候儀も可有御坐候間乍恐御聽取奉願上候

(押小路は潔)

一 千萬奉恐懼候得共押小路卿之御答書申上候間御家來より相達候様奉

願上候誠に以不敬之儀申上萬々奉恐入候得共昨日之御内諭に隨ひ相認申候無間發途大取紛大亂筆捧呈仕奉恐入候偏に御容赦奉仰願候幾應にも時下御自玉爲

皇家專要御事と奉存上候恐惶頓首敬復

十一月十日

孝 允

内 拜 復

(此書は宛名を闕く明治四年木戸孝九が三條實美に贈れるものなり)

一一四 青木周藏宛書翰 明治四年十一月十日

品川始へ書狀不差出候間可然御致意是願候必兄には其御心組に御用意相願度後來之處も得と御相談を得十年之害を今日に豫防仕置外なく候苦情御垂察可被下候

先達來度々朶雲御投與逐一相達拜見仕候彌以御勉勵大賀此事に御座候

(品川は品川彌二郎)

段々未聞之高説承り實に致感伏候誠に日本も御一新前後甚議論も多端此際統一之略無之とはと種々苦慮も仕候處又至今日候は開化々々と各利辨を以互に僥倖而已を相窺人々自ら輕燥淨薄に相移り忠義仁禮之風拂地候勢十年之後眞に如何と苦慮煩念此事に御座候是又不得止之一時勢とは相考候得共屹度前途維持之目的無之とは不相濟事と只管煩愚按申候兄にも此際一應御歸國を只々相願申候十年後にも相成候は自ら又人才も出來可申其間之處實に開化之大弊出來可致と是而已掛念至極に御座候瘵毒之もの欲驅病むやみに服樂いたし候終に病毒は相去り候ともまた却る藥毒之爲に斃れ候例不少此間之處眞に一大事と奉存候付は深遠之御志も可有之候得共狂一應御歸國を企望仕候弟も此度使命を奉し不日發航いづれ拜青之上尙深密に御談も可申候得ども何卒其御心組に御支度相願度左候弟等歸朝前後に是非々々御歸

朝是祈候且又書生一條弁理公使之一件等は此度取調らへ候相發し候に付其節御相談可仕交際各國へも是非公使は被差置候にも相決し申候是も現場之處に人員は相定め可申候先は爲其草々頓首

十一月十日

允

(周藏は青木周藏)

周藏 兄御内拆

一一五 杉山孝敏宛書翰

明治四年十二月十七日

亂筆故御推讀可被下候左候て御火投是祈候

爾後彌御精勤と珍重此事に御座候小生も無滯過る七日サンフランシスコへ到着當地人民之引受け意外なる懇切なる次第に爲其却る日々不得寸暇言語は元より不通各國之禮節も不相弁付は自ら心思を勞し候事も不
少信切に束縛せられ候姿御笑察可被下候市街等之形様は兼傳承候事も有之凡其想像と格別相違ひ候様にも覺へ不申候得共學校其外製作場等に

至り候小生之は中々我痴筆に難盡後來子弟之爲には大に心を用ひ不申は全
 國之保安は所詮無覺束乍去大に可歎は今日開化先進之人は漫に米歐文明
 之境を賞し我の百端備らざるを説候へども其心多くは罵るに在る歎ずる
 にあらず其證は米人等之舉る懇待厚遇其心専ら我を誘導するに在り然る
 に一船中にも僅々之人にる書記官は理事官を愚弄すると歎何と歎多少
 其氣味風波も有之紛紜なきにあらず是を全國に推し試に相論し候ときは亞細
 亞洲中にも未我に及ばざる之國我今日開化に進歩するを慕ひ使節を馳
 せ聘問之禮を修むるに當り開化人之論米國之我を待つと同じからざる必
 んは國家之保安元より難し此風を改め此弊を矯る學校を以急務とする之
 外他なし我今日之文明は眞之文明にあらず我今日の開化は眞之開化にあ
 らず十年之後其病を防く只學校之眞學校を起すに在り田中氏なども余程
 心懸け候様に相察申候へ共幸兄なども其省に御在勤故氣脈相通じ歳月を

(田中は田中不二麿)

(長は長英)

不費候は何卒速に成就候様只管希望いたし候多端故長氏へも別に書狀は
 出し不申尙御相談可被致候國家永安之長策は僅々之賢才世出するとも一
 般に忠義仁禮之風起り確乎不拔之國基不相立候は千年を期し候とも國
 光を揚る事不可知風を起す基之確定する只人に在り其人を千載無盡に期
 す眞に教育に在る而已決る今日之人米歐諸洲之人と異なる事なし只學不
 學にある而已任幸便愚按之件申進候其中時下御厭第一に候草々頓首

十二月十七日

尙々此後定る多端にる書狀も得出し不申候と存申候に付何卒御國之近況尙新聞

等も幸便に御隙も有之候は、御投與可被下候大木其外へも可然御致意

御頼申候留守中之處御氣を就け可被下候本文只愚按之處を任筆相認定
 る不通之事も可有之是亦不學之罪今更致し方無之候以上

玉池 兄御内密

松菊生

(玉池は杉山孝敏カ)

一一六 西島青浦宛書翰 明治四年十二月十八日

彌御平安珍重此事候さて五千余里之海程格別之風濤も無之無滞聖港へ到着實に太平之名も空からずと相考申候上陸後は半日之寸暇も得不申日々之奔走には甚困却いたし候乍去人民之懇切に相待候事は意外之事に總る此等之情實は未日本人之偏く通知せざる處にして天地之間信なくむは文明とも開化とも難被申我國も將來之處隨而煩念不少候于時出立前は不一形御心配忝存候已に當地發足之寸暇も無之書狀等も一々相認められかたく何卒宍戸山縣三浦鳥尾福原長諸氏へ無事到着之段態と御吹聽可被下候尙留守中之處可然御頼申候其中御用心第一に候草々不一

十二月十八日

尙々今日之様子には到る處定る繁多に可有之朝より夜半まで日々集會候同游歩等には懶惰ものは一入當惑爾後書狀出し候事は出來申間敷歟乍去何卒日本之近況を幸便之節細書に御認御送り可被下候尙日新堂

(宍戸は宍戸山縣三浦鳥尾福原長諸氏へ無事到着之段態と御吹聽可被下候尙留守中之處可然御頼申候其中御用心第一に候草々不一)

(青浦は西島青浦)

諸子へもよろしく

青浦 足下

允

一一七 杉孫七郎柏村信久保斷三宛書翰

明治四年十二月廿日

亂筆御免尙御内披に相願候

先以

從三位様御機嫌克被爲在御互に奉恐悅候且また各位御壯榮に引つき御配慮と奉賀候于時弟等も五千餘里之海上格別風波之煩も無之無異過る七日聖港に到着仕候實に太平洋之名も空からずと存申候尤日本海一二日之間は船中食事も三度とも相認候ものは少く御座候處着前は全旅宿住居も同様に相成時としては船中とは不覺様之氣味有之申候さて着港之上は人民之優待懇遇意外之事不少當港にても日本使節響應之爲め十萬近き散財等いたし候よし元より國之貧富大に異なり候へども情態におゐて又甚異な

(從三位は毛利元徳)

る所有之申候華聖頓におゐても已に日本使節は合衆國之國家として相遇し候に付入費等之事も議院に下し候趣下院は直に相決し候よし如此譯に候へは饗應入費等謝絶仕候次第にも難參左とて食ひ逃けは相成申間敷候間何歟相應之報は不仕而は獨立國之ひれも無之と相考申候如御承知一向言語も不通強而各國之禮節も不相辨多少之心思を惱し且其上日々半日之閑暇も無之には實に困却仕候厚遇之爲に束縛せられ候有様御笑察可被下候尤市街其外之形様は想像と左まで相違之様にも覺不申候得共大體之處は暫く閣製造所學校等當港位に而も甚驚き申候尤當港も余程近年盛に相成候よし乍去物價之高直には困迫仕候是も先年南北之大戰爭より如此譯に相成候事と申事に御座候物價之事は逐々傳承も仕居候へ共現場之處是亦意外に御座候于時從三位様御尊も被爲在どふ歟來年は御洋行も被爲遊度御様子に御座候處自然御決定に相成候は、何卒各國之様子大様相心得候人隨從仕諸事御世語厚く不申上るは現場必御不都合不少且是迄御英名

（長府公は
毛利元敏）

は各國皆傳承仕居候事に付坐作進退總而御注意不被爲在而は不知々々笑誹を御招き被爲成候様之事不少と奉存候御食事等之儀は尤御注意被爲在度奉存候其上自然 御奥様にも御同行被爲遊候へは尙更之御事と奉存候大様は各國之禮節にも御承知被爲遊候而御發途可然歟と奉存候此度長府公御獨行被成御奮發に而めて度御事には御座候へ共段々他より色々耳に入候事不少實に御當人様は御無理ならざる事に御座候へ共現に御不都合有之候と其笑は不被免精々御氣を就け候へ共意外之事も有之甚心痛仕候此度元之諸侯華族も五六名洋行有之候得共大概一兩人は心得候もの隨從仕居申候是より先き華族中にも書生同様に而獨行も無之而不相成事と愚考仕候へ共此度

從三位様にも御出被爲遊候へは其譯にも無之此邊之處乍老婆心甚氣にかゝり申候間乍勿卒各位御含までに申上候今日我開化日に進歩仕候姿に御座候へ共熟々各國之形情を察し候邊におゐては前後緩急之措置大に齟齬

仕候事も可有之歟必十年之後開化之弊も出来可仕是又不得止之勢に御座候得共着意無之は又國家之一患と相考申候只管教育以る忠義仁禮之風を興し法律以る是非曲直を正し千載億兆をして不誤之基礎を立候事實に肝要と奉存候先は任幸便一書奉呈候爾後當地之様子に屢呈書仕候暇も有之間敷と奉存候此段御容赦可被下候決る尋常之御書通も御斷申上候乍去何歟新聞又は時情等御序も有之候は、只其事而已廉書にても被仰下候へは別る難有奉存候其中時下御自玉第一に奉存候草々頓首

十二月廿日

尙々在邸之諸先生に可然御致意奉願候以上

杉

柏村 各位

久保

孝 允

杉は杉孫
七郎柏村は
柏村信久保
は久保斷
三
高杉は高
杉小忠太木
梨は木梨信
一吉田は吉
田右一

御國へ御序之節高杉木梨吉田其外諸彦へ可然御致意奉願候

一一八 吉富簡一宛書翰

明治四年十二月廿日

亂筆御推讀被下御火中、

御答書拜見縷々御懇示却る赧顔之至に御坐候只御文中に萬一舊に不復は御恨申云々第一向合點に至り不申候弟兎角痴情と申ものは多年任外之地に立ち不得止之事情より我道理を滅し我遺恨を殺し吞涕包辱爲人に壓抑せられしこと難敷是聊公事を思ふ之念を存するにあり而已雖然必竟所身之尤拙愚と云べし是又自ら不知にあらず乍去弟亦人也一生人之壓抑を受けねはならぬと申事も有之間敷巨細陳述候ときは百萬にて不能盡此段は聊御憐察可被下候海陸別る御自玉第一に御坐候草々頓首

十二月廿日夜

松 菊

樂 水 兄内密御獨披

(樂水は吉富簡一)

木戸孝允文書 卷十二 明治五年

木戸孝允文書 卷十二

木戸孝允文書 卷十二

一 三浦梧樓宛書翰

明治五年正月十一日

爾後彌御壯剛に御盡力と大賀此事に御座候弟等も去冬十二月七日桑港へ到着候處意外に引受有之日々爲其に奔走漸二十二日發軔候處鐵路爲雪埋滅桑港より九百余里サールトレーキと申處に滯泊不圖こゝに越年いたし候此地は海面より七千フット之高地に於千八百四十六年末共和政治之管轄に入らざる前モルモンと申一種之宗旨ニユールク其外に於逐われ終に千餘里之人跡を絶ち始百四十四人之ものこゝに來り當時は二萬余之人口なりモルモン之和尚をプレシテントと同じく稱し候而威權も甚強く此節華聖頓政府より少々手を入取押へ候得ども元來教宗之事は任自由候國法に付別にいたし方も無之此節和尚へ番人等を附け禁足之姿にいたし

木戸孝允文書卷十二 (明治五年正月)

三百二十九

居候も曾る此宗之もの他宗之人を殺せしことこれありしよしを以と云實に此宗之奇なる一夫多妻を娶とり已にプレシテント・ヨングなるものは當年七十余歳に而十八人之妻六十余人之子あり實に開化之國と雖も様々之弊あり信迎する人民におゐては合點に入らざる事も不少又理學者などに至り候は總而教宗之弊を意外に歎息いたし居候ものも有之新來に而一般之形情未中々相分り不申候尤モルモンは買女等之事は甚嚴にやケ間敷申候よし一珍事故任筆相認申候于時出發之節は何歟御配意奉謝候且又次第に御折合もよく御意味深長と御察申候必々此度はめて度御永久乍陰祈處に御座候却説モルモンは世界之一珍事故相認候事に付萬一も御信迎之念發起候は不相濟此段御戒心可被下候福原河野へも可然御致意是願候先は任幸便相呈候其中時下御自玉第一奉存候草々頓首

正月十一日

尙々米英之間不穩此往如何と難相圖頓に新聞御承知に可有之山縣へ承

(福原は福原茶輔河野進は河野龜之)

(山縣は山縣篤藏)

り候まゝ申越置候以上

梧樓兄劍下

允

(梧樓は三浦梧樓)

二 檳村正直宛書翰

明治五年正月十三日

爾後彌御堅剛に御盡力と大賀此事に御座候さて出立前に御面倒之儀御願仕候處早々御送被下忝奉存候いづれ歸朝之上御禮可申陳候且又御託之廉々は慥に承知器械之事故工部省之肥田に相頼置詮儀いたし見候都合に御座候此等之器械は總而佛蘭斯がよろしきと申候公評に而御座候米國にも巨大之器械場も有之申候得共其向に無之國々之長所有之事と被相察申候于時に弟等も舊臘初七桑港へ到着候處此地之人民意外之懇遇に而不圖長滯いたし候桑港に而待遇之爲め數萬金を人民費せしと云米國政府に而は此度之使節を米國之國客と見なし華盛頓滞在之入費五萬金を募り候よし已に議院に下し議院之論至一決申候漸

(肥田は肥田濱五郎)

二十二日に此地發軔候處鐵路爲雪に埋沒桑港より九百余里フルトレー
キと申候處に今以滯在終にこゝにて越年いたし候鐵路出來已來此道路如
今年大雪は未曾有と申事に御坐候當年は山中之難所へは盡道筋へ屋ねを
造築すと云已に當地まで之間四十五里屋中を馳せ候處有之申候山中最高
き所は八千二百四十二フート海面より有之候よし此地は四千フート余と
云此地は千八百四十六年モルモン宗と申一派之宗旨合衆國之方より被逐
終に此地に來る居住せしと云千八百四十七年メキシコ之戰爭に於て又合衆
國之管轄に入れりモルモン之徒最初百四十三人人跡之絶たる所千三十余
里を経るこゝに來り當時は二万余人之人口あり尤三分之一は他宗之もの
なり則此モルモン之和尚はプレシテントと唱甚威權も有之申候此宗之奇
なるは一夫にして多妻を娶とり已に和尚などは十九人之妻あり子供七十
余人生存するもの四十八人寺堂は高大にして寺中へ万余人を容れり耶蘇
派なれども如此一派を立神より直に教道を授かると云文明之國に於ても今

日如此宗派之相開け人民も又眞に信向いたし候など、申は實に不思議之
至と相考申候尤華盛頓政府に於て甚此宗をいとひ候へとも元來國憲に宗
旨は人民之信向にまかせ有之候故別に如何とも難致尤當時和尚は禁足之
姿に於て兵隊之警め有之申候是は此宗之もの曾て他宗之人を害せし事有之
其責和尚へ歸し候姿一珍事故見聞えまゝ申上候此地之傍に鹽湖有之長き
處は百余里に涉り申候元來ソールトレーキと申字義は鹽湖と申事よし
鹽氣甚烈敷一魚も不能生此水を蒸發するときは三分一之鹽塊を得ると云
如此山中に如此鹽湖之有之候も亦世界之奇に御坐候于時に又曾て米國
南北大戰爭之折英國より竊に南方を相助けアラバマ名其外殆十艦ほど南
方英國に於て造製余程北方を惱まし候處戰爭一定後米政府より英國へ相論
し最初は英にも承伏不致候處孛佛之一條等有之英にも歐洲之勢相傾きし
より終に昨年来へ償金を出し候都合に相決兩三之小國へ相托し候處此度
米より申出し候金數四億萬弗と申事に於て英にも意外被出一混雜を出し申

候アラバマ其外には北方之船艦を撃破せし損失は都合九千萬弗余と申事に御坐候へ共爲其に戦争之及遷延其外諸事之關係細密に算用いたし且平定後今日まで之利足等一々勘定いたし終に四億萬弗余に至り候よし此決局甚以困難と被窺申候此形に於一戦争にも至り不申は相濟間敷歟と被考申候如此世界平均を失し候ときは又如魯は必コンスタンチノブルの英之新聞に取らるゝものなら來り取れと申事有之申候

不出は印度の突出候歟も難圖決る他之事に無之戒心不致るは不相濟形勢と竊に想察いたし候任閑暇出たらめに相認候申候萬御推讀可被下候近來御地之光景如何外國人等も屢往來御地之人民も速に宇内之有様を察し候よふいたし度開化之國ほど他國之人をよく遇し不開化之處ほど異邦之人を嫌らひ益國勢を縮退いたし申候乍去又弟之頑固とは奉存候得共開化之國にも醜態不少何卒惡弊には染さる様いたし度今日之勢又竊に是等之相も深く杞憂仕候巨細筆頭に難盡候此後は如今日閑暇を得候事も六つヶ敷

度々書翰も呈し候事不叶歟と奉存候何も歸

朝之上緩々御嘶仕度奉存候弟も御國難に當り候へは乍不肖微軀之あらむ限元より盡力仕候へ共省願仕候へは弟等今日之人に無之積年之宿志に付此御用も相濟候は、何卒勇退仕度と只管祈望仕候左候へは聊なりとも却る報今日候一端にも可相成と頻に奉存居申候先は爲其得貴意申候其中時下御自玉第一に奉存候草々頓首

正月十三日夜

(松田は松田道之)
(藤村は藤村紫朗)

尙々明日當りには當地被相發候歟之新聞も有之申候松田藤村自然未御地在勤に御坐候は、可然御致意奉願候曾る松田の燒物相頼置候に付乍失敬御序も御座候は、御嘶可被下候難波常二郎相窺候は、弟無事之段御申聞け可被遣候且又至極御多務之央奉恐入候得共相成候事に御座候は、別番之儀御配意奉願度無遠慮御懇意に甘へ申上候以上

(十八眞は横村正直)

十八 眞兄

孝 允

三 河北俊弼宛書翰

明治五年二月朔日

大取込大亂筆御推讀奉願候

爾後彌御堅剛に御勉勵と奉大賀候さては弟等今般蒙使 命舊冬發邦途中も甚隙取漸七八日前華盛頓府に到着洋曆三月四日大統領へも面接無滯相濟申候いつれ一月位は此余相かゝり可申是より御用にも取りかゝり候積に御座候付るは兩三月中には必拜青可仕實に此度洋行仕候も且老兄などへ海外に御談話申候間意外之事に只々屈指其日を相待申候于時豚兒は不一形蒙御高意候事と難有奉存候乍此上萬端可然御鞭策奉願候先は任幸便一書奉呈候何も拜青ならでは中々筆頭に難盡候其内時下御自玉第一に奉存候草々頓首

二月朔日

尙々今日までの處當邦にても至極引受よろしく先御安意可被下候于時

又如御聞取日本も開化に日に月に赴候姿に御座候へとも兎角皆偶然より出候事不少付るは此往實に開化之弊もまた可恐と只獨不堪煩念事も不少自分にも根本の處確乎仕候邊尤御大事に御座候且又總る物に確然たる法則と申ものも無之然して人になまきゝに馳せ自主と歎自由と歎名に勝手之事而已相謀り人情は只々輕燥浮薄にる移り已に今日六七年前に比するときは霄壤の相違も不少候實に弟なども如何なる因果者に候歎始も中も終も一生中如意相成候事未一度も無之於今日も只々後來の事而已此成行にるは實に煩思仕候付るは總る法則の確定仕候處尤急務歎と愚考仕候付るは根本律法等コンステユーション之事よりして別紙事件等何卒英國にる被行候邊御詮義被下置候様奉願候左候は、其内にる又大に御國の爲にも相成候事不少と奉存候草々

義二郎老兄

孝 允

(義二郎は河北義次郎俊弼)

四 河瀬眞孝宛書翰

明治五年二月十一日

亂筆何も愚按之まゝ老兄へ申上候間御推讀被下他へ何も御容赦奉願候已後とても内々に御覽奉願候

留守中之處は別あよろしく御願仕候

大久保は
大久保利
通
藤博文
伊
野村は野
村素介藤井
は藤井勉
三

爾後彌御壯剛に御精勤奉賀候さては去月廿一日一同華盛頓へ到着仕候然處一事情出來此度大久保イ藤歸朝候都合に立至り付るは弟等も意外之長留と可相成と當惑いたし居候兩人歸朝云々も御承知に相成候事と存別に不申上候野村藤井等も無間歸朝可致實に兩人どもは遊歴之得自由候事と浦山敷弟などは如御承知言語は不通此度使節と出懸け候に付るは黙々中百端之苦心總る此間之心事筆頭に難盡心外之事ばかりに何も御想察可被下候于時出立前にも御内話申置候通何卒乍此上御苦勞被成聖上各國之形情政體等も本譯書にあり御覽被爲遊世之變遷を具に萬古

御洞察億兆を統御被爲遊候御工夫被爲在且洋文等も御自在に御讀破被爲遊候儀御盡力奉萬禱候此行洋文を解し候徒も不少且總る之人情を相察し候に實に人情の日に浮薄輕燥に相馳せ是又今日不得止之勢に有之候歟とも相考候得ども必開化之弊可恐ものも可有之未言思自在之權を與へ候譯にあり無之元より可許ものは不得不許は今日之時勢に候へ共已に公然共和政治等之事も議し更に奉對天朝候も忌憚無之有様纔に此兩三年前を想思候得ば眞に意外之相違にあり是全眞之開化に趣き候事とも難被思其件々を數ふるとも一二に不盡竊に將來を想像仕候る獨り不堪苦憂事も不少恐多くも終に天朝をして自ら一名物之様相心得候様成行候るは死すとも瞑目する不能實に此間之處誠に以御大事之折と奉存候御同様に誓る所不安付るは一日も速に御根本之確規肝要至極と奉存候爾他申上度事も御座候へ共取急候に付閣筆候其中時下御自玉爲邦家第一に奉存候草々頓首

二月十一日

尙々御内輪へ可然御致意と且無事之段も御傳へ是願候以上

河瀬老兄

木 偶

(河瀬は河瀬直孝)

五 杉山孝敏宛書翰

明治五年二月十一日

大亂筆御推讀可被下候

彌御堅榮と大賀此事に御座候さては弟等も漸正月廿日華盛頓へ到着然處一事情出來副使中歸 朝之都合と相成當地へも不圖長留となり歸朝之處も默算難相立候竊に推考候に今日之勢開化之進步一日を争ひ候譯に獨立之權利を持し候には中々則今之有様に於ては所詮無覺束候得ども今日洋學家之風多くは忠義仁禮之風を拂ひ前途只此弊而已を殘し候様成行候は萬世之遺憾と甚苦案いたし居申候于時弟も如御承知少も不能解洋語付は各地之形情も中々巨細に盡し候様至り兼總る内外之事殘念なる事ば

かりに於て以志其半を不能盡其上使節之 命を奉し候事一生之誤今更大後悔いたし方無之一々自由を被妨候事はかりに甚當感いたし居候于時兄は未御壯年之事にも有之候に付は何卒逐々外國人と直話に於ても十分相調候ときは必事業往々を助け候益も不一形事と相考申候に付公暇に英國學に於ても御始有之候は如何英學と申候はいつれ東洋は米國に近く其上亞細亞中に於ても印度其外英語之處而已多く候間於我 朝も余り區々は不相成候方却る後來學術進步之爲歟と愚考いたし候其儘申出試候先は任幸便得貴意申候其中時下御自愛第一に御座候留守中之處乍此上可然御頼申候草々頓首

二月十一日

尙々曾る御頼申置候内々別番之二條も御加入可被下候尙前後端々有之申候へ共取紛認候事出來不申是は曾る御承知之部中に關り候また其時之關節多少心志を勞し候事に付有之まゝ相認只々眞之内密兄まで御

目に懸け置申候萬只兄而已之御合に可然御認置可被下候尙前後もよ
く々々相分り候處は折々認置他日御送り可申候に付左様御承知可被下
候以上

(杉山は杉
山孝敏)

杉山兄

木偶生

六 檳村正直宛書翰

明治五年二月廿日

別紙一封米國より到着に付郵便に附し御廻し申候間御落掌可有之候也

壬申二月廿日

大使事務局

(檳村は檳
村正直)

檳村京都府參事殿

七 井上馨宛書翰

明治五年三月十一日

爾後彌御壯榮と珍重に奉存候さては不遠イ藤共も歸朝之頃合と想像仕近
情同人どもより萬御承知と奉存候實に此度之事件又我

(イ藤は伊
藤博文)

朝之一大事件にして恣りに輕動なきを謀り而して抑一着を失せし姿に而
必竟弟等之不肖如何とも今更いたしかたく候得共痛歎之事而已に御座
候イ藤共も一旦歸朝之都合に相決し弟等も匆卒どさくさに同意いたし
候へとも今日情熟考仕見候へは弟歸朝仕候イ藤等は留置候事至當と存
後悔いたし候其譯は例のイホーブ之上下に新下りは弟等に十分候
得共當地之實際に於は甚困却仕候元來今日之行がり國務卿へ面會之初
發我開化之證跡を盡舉言し其よりして港數口を開き内地之歩行を便にし
居留地を廢し雜居を許す等其他彼是等之事件我開化を進步する之助に
其益雖在我也彼も舉る希望する所にして國務卿之誠に結構なる事に
奇妙々々どうぞ御開可被成政府も御心配に可有之など甘く申候我權利
を失ふ所之稅則也港規則也裁判之權也地法規則也未一つも我に附與する
事を不許漸過日地法規則丈け且々押付候へ共未十分に至り不申始終彼之
所曰は日本之進步驚入候ほどにて誠に感服いたし候且又獨立たる之權を

有する元より言を不待候へ共二十年前を想視候へは未全國之人蒸氣船も
不見人而已に

天皇陛下は不及申政府上之事決る疑惑いたし不申候へ共全國之人心偏く
進歩いたし候と申事は難認付るは人之生命難限難請合に付今日之有様に
御希望之邊爲我人民之にも一々御承諾いたしかたくと申處に固着いた
し容易に動き不申困り果申候乍去開港之事内地歩行之事等爾他三尺之童
子を以雖言弁皆相調候事に我に復する之權を不復ときはたとへ條約此
行に雖不調成我國と我人民に對し決る所不伏也と奮發覺悟いたし居候へ
とも此間之苦心焦思難盡申先彼之求る所を尋候る徐々と起議論候ときは
余程之我益も有之候所自慢も所により候はは大損と相成申候且又デロン
グを輕蔑し根本之議などには格別關係せざるなどて疎外勝に相成居候
處内實は國務卿一々相談等もいたし候よしにパークスなども傳信機を
以懸け合候事も有之候よし藤など歸り候後國務卿より使節はデロング

を御いとひしよしに粗承り候へ共格別不苦候は、會議席へ出し度など、
相搦いたし候事も有之、藤出立之前後も取紛候事歟一言もテロングへ不
告して去候様子に彼も甚不平を鳴らし居候よし應接上に申も税論など
の事は始は都合もよき様に被察候處爲彼に一時甚混雜もいたし申候色々
御世話に海外に遊び一愉快と相考候事種々無量又如此心配に耳目に
觸れ候事も面白と存候暇無御座候、藤之未一事も調候事無之に歸朝いた
し候を今日行當り候る甚残念と相考へ申候乍去於當國十分相論し置候は
、歐洲は自然容易歟とも存申候○于時文明開化之風も熟々推視仕候に人
々之智慮實に増進いたし人之惡き事は又無此上少しも我利を争ひたとへ
公法か有之候とも何が有之候とも油斷を仕候と實に不可復之大損をいた
し可申候日本之開化は智慮よりは人が早く悪く相成申候歟と懸念仕候且
其上花を競ひ實に土中へふするを嫌らひ長永之目的日に月に盛隆之境に
眞に進移いたし候等之手段は兎角乏しき方に御座候然處兵事に付候るも

(森は森有禮)

不得止莫太之御入用に候得共實に學校教育等之事は眞實に今日可成丈け十分に御手之着き候都合に有之度事と奉存候于時先達を森少弁務學校之事に口を出し種々議論もいたし居其節は弟も可然と相考候處其後能々承り見候へば森も一ト山々有之候事に書生中に亦も力ありて篤實之ものは一向折合不申候此節不都合之次第も逐々耳に入甚不面白存候他日公論も必有之候事と奉存候最初森へ之御沙汰書其外懸合事等段々洩れ候を森大不平に亦一向働き不申イ藤其故籠絡いたし其後動き出し其中きやつも亦イ藤を籠絡せねはと申候處より小手段いたし候事も有之誠に拙き事體見るにも耳にも困り申候萬一も文部へ森を被召呼候など、申事御座候は、必彼今日之處今日之有様に亦は御國之御爲とは不相成と奉存候間自然御聞及にも御座候は、御一論可被成候○米英之様子且歐洲中之光景も自然平均を失し三五年には必不穩事も出來可仕歟今日之處に亦は米英之處も或は消へ或はもへ新聞も時々相違候へども自ら不安之情も有之申候何

卒日本も損之不參様に進歩いたし候事只管祈望仕候曾亦逐々御談申候事も有之且出立前にも御嘶仕置御覽被下候哉否は存不申候へ共一書を差出し置候處何卒士族之始末丈けは少しも速に御手を被下度事と奉存候付亦は元より決局までには多少之年月を經不申亦は所詮被行かたき事と奉存候於弟はとごまでも山口におゐて御相談申候處至當歟と奉存候先は不覺例之長文に及申候間筆を閣申候草々頓首

三月十一日夜

允

(世外は井上馨)

亂筆御推讀被下候亦御火中可被下候

八 河北俊弼宛書翰

明治五年三月廿一日
(西曆四月廿八日)

本文に田中文部の書狀御頼申候處田中は未當國滞在の趣此程承知仕候付是より直に田中へ相廻し却亦此書も田中へ託し申候

(田中は田中不二磨)

木戸孝元文書卷十二 (明治五年三月)

三百四十七

亂筆御高恕被下御内見可被下候

西洋四月三日の朶雲兩三日前に相達拜見仕候彌御清剛に御勉勵と大賀此事に御座候豚兒も不一形蒙御高諭萬謝難盡奉存候弟も于今華盛頓に滞在先達伊藤大久保なども俄に一應歸朝の都合に至り然して内談判事等は丸に半途中に未一も決定致さざる事而已如御承知弟も交際其他外國の形情も巨細存不申不案内至極に付大に勞心思左候必十分ならざる事と獨想像仕候乍去必竟外國に關係候事は又必我國と我國の人民にも一に關涉仕候故國と人民の損益利害は幾應にも顧思不仕はと少々かた氣を不
(伊藤は伊藤博文大久保は大久保利通)
 得不張之氣味もなきにしもあらず此間の苦情御降察可被下候至今日に大略目途も相立て草按丈けは相調候に付彼へ遣し置申候へとも此後彼の考又如何と相待居申候付は未發足の目途も難相立候へ共何卒片時も迅速にいたし度頻に心せき申候兩三日は七十七八度位の暖氣に随分困り申候尤今日は余程氣候も相變り申候へ共始終不順に老骨には些不適當

(野村は野村素介)
 (長興は長興專齋)

(山田は山田顯義)

(長府公は毛利元敏)

を覺へ申候且又御書中の云々委曲拜讀いたし弟も只管拜青の折を屈指希望仕居申候十分御相談をも承知仕乍不及弟力の届候限は盡力盡意願處に御座候間此段御心安く御合置被下劣弟も不幸歎幸歎父兄親友十に九は皆泉下の人となり弟子今碌々存生時々無窮の感慨等も出來實に人世の不幸無此上と悲歎仕候何卒爾後如兄弟眞に御付合いたし度候に付必々内外無御腹臆御示し可被下候先は御答旁一書相呈申候野村は先達出足此節は英國へ到着歟と相察申候依此狀は御返し申候野村長興へも別に書狀出し不申候間弟等且々無異乍去長滞には甚困却大に先發之諸子を羨み候事は御嘶可被遣候山田は直に佛へ渡海のよしに付折角の御信意故其まで御預り置弟面會之折相渡可申候尙又御序の節留學之諸氏へ可然御致意奉願候元長府公も無事に御着のよし承知仕大に安心仕候先達南よりも一書差越申候へ共是又不遠内に面會いたし候事故別段不及申返答候間御序も御座候へは可然御斷可被下候先は其内時下御自玉第一に奉存候草々頓首

洋曆

四月廿八日 (○太陰曆の三月廿一日に當る)

義二郎兄

孝允

(義二郎は河北義次郎俊彌)

尙々乍御手數別紙御願仕候日本より此節始る書狀一時に到來都合相變候事も無之七十一縣の相定のよしに御座候藝州大地震と申事も申來候以上

田中は未着不仕候は、着の上御渡可被遣候

九 西島青浦宛書翰

明治五年三月廿八日

亂筆御推讀々々兼る頼入置候書畫其外骨董等保護吳々御頼申候

(野村は野村素介藤井勉三)

爾後彌御無事と珍重々々十一月廿四日之書翰此三四日前相達候此方于今華盛頓に滞在未いつ頃出立之目途も難相立此度は意外之心配而已に而兎角早晚も心算齟齬野村藤井など之流を大に羨み申候さて留守中は一統何

(杉山は杉山孝敏長は長英) (勝三郎は小野勝三郎物兵衛は三輪惣兵衛)

歎心配と想察いたし候乍此上申合可然御頼申候先便に新聞之事申越置候に付引受に致し一月に一度宛朝野都鄙何事に亦も耳に入候事不殘申越もらひ度杉山長其外へ折々聞合せ候は、世上之事も相分り可然筆取は勝三郎惣兵衛に亦もいたし可申決亦少しも嫌疑之事は無之只此方之耳に入候までに御座候
安市太郎井上へ養子に參り候とはいかなる事に候哉慎乎彼は安之嫡子に亦現に父も有之候故甚以不思議に相考申候是又當時如何成行候哉致承知度候鶴事は彌嫁候哉彼之ぶしように亦は些江戸氣には必向き申間敷と相考候

(三洲は長三洲)

三洲へ相頼候畫幅は御見合に亦よろしく二階之襖は當人へ直にも相頼置候に付中筋之處決亦無念は有之間敷と存じ申候昨年足下へ託し三洲へ相頼候絹幅も留守中に甘く相調候様いたし度御合までに申入置候
米國之山水自然南派之流多く足下且長など之眼に觸しめざるは甚殘念と

存候人間之書畫は各邦互に趣向を異にいたし候へども造物者全地球おいては寒暇肥瘠に依り自ら草木等之種類は類を異にいたし候ものも不少候得共山水等人間書畫之趣向を異にし候様に無之南派之筆を以寫し候は、余程面白き事歟と只々想像いたし申候先は任幸便一筆申入候其中時下御用心第一々々何卒近邊之諸友へ御序によりしく御傳言是頼候草々不一

三月廿八日

青甫 足下

松 菊

(青甫は西島青浦)

(鹿正は鹿島庄右衛門)

(杉猿村は杉孫七郎)

尙々鹿正は無事に候哉廉直に勉強いたし候様御傳言可被下候以上杉猿村も頓に歸京と相察申候是又よろしく御傳言當時之様子如何之消光に候哉足下より序に御申越可被下候

一〇 尖戸璣宛書翰

明治五年三月廿九日

大亂筆御推覽是願候

爾後彌御清榮に御精勤と奉大賀候弟等も華盛頓へ今以滞在最初之心算とも違ひ彼是手間取今日之様子には歐洲にも余程時日を費し不申は不相成歟と想像仕候イ藤等も俄に歸朝之都合に相成此程は歸着いたし候頃と相考申候舊冬後之情實は逐々御承知と奉存候如弟等不案内之もの居残り引つゝき心痛而已仕却る其益は有之間敷と奉存候さて御當任之處も不一形御配慮と奉存候御一別前にも度々御内話も仕候通實に司法之處今日之尤急務にふなりこふなり速に外國人も我法律之下に爲立候様相運不申は獨立自守之體裁相立不申而已ならず隨る廉々其權を被削候事不少定る日夜御勉勵に逐々御着手とは奉存候得共何卒重立候處へ十分わざ之相叶候人物御登庸肝要之御事歟と奉存候たとへ逐々外國人御雇に相成候とも訖度承應いたし候る相働候もの無之は事實容易に相舉り申間敷尙乍此上御工夫奉仰候未歐洲之

(イ藤は伊藤博文)

形情は存不申候へ共當國にも案外に出候事も亦不少候處元來進歩する

(野村は野村素介藤井は藤井勉三)

所以一々其元因有之候事に付何卒御國之處も順序本末を不失處只々奉祈念候野村藤井などにも歐洲には面會可致と存居申候處如此次第に付所詮間に合不申定る逐付兩氏も歸

(杉は杉孫七郎)

(佐々木は佐々木高行)

朝候事と想察仕候杉出京之様子も一向承知不仕當節は必一家舉る出京と存申候實に日日御多務と奉存候得共近況御家來にも御認させ御投與奉願度頻に御國之形情如何と心頭に浮ひ申候且又御省之處は現に大輔理夏として渡航當時は歐洲へ参り候得共尙御勘考之事は十分被仰越度佐々木も八九月頃までには先達る歸朝仕候様に申居候何分にも些働き候もの屹度御撰擧無之は逐々御手も廣く相成候事に付現場之處實に如何と奉存候先は任幸便一書奉呈候其中時下御自玉第一に奉存候草々頓首

三月廿九日晚

尙々乍毫末 御滿堂様へ可然御致意奉願候

(潮坪は穴戸磯の號なり)

北堂君には彌御堅固と奉存候于時繁雜之際却る糸米之山莊なと思ひ起し候老兄潮坪之風色等御願廻無御坐哉の本文云々申上候儀定る逐々佐々木始得御意候事も可有之と奉存候得共段々現地之情實を窺ひ前途之處も益懸念之余申上候事に付左様御合可被下候たとへ開化に趣き候とてサントイス如き之有様に遺憾至極と奉存候先は草々拜

(敬字は穴戸磯)

敬字 老兄御内拆

允

一 西岡逾明宛書翰

明治五年四月二日

御直拆

大亂筆高恕

先以御清榮御勉勵奉大賀候さて過日は伯林府へ朶雲御投與忙手拜見仕候不取敢御答に可及之處其節歸朝之沙汰到來去留に付彼是混雜いたし居且折惡持病等に惱まされ内外之

(久米は久米邦武)
(鮫島は鮫島尚信)

不幸に取紛意外之失敬偏に御容赦是願候此段久米兄より御斷申陳吳候様
相托し置申候御承知被下候事と奉存候ブツク氏一條はい曲鮫島へ相談
し同氏之勘考を以使節之處も何と歎相決し候は、穩便に可有之と奉存候
いづれ同氏より可申上事と奉存候愚考に、折角老先生も是まで本邦之
爲にも本邦人之爲にも一入盡力いたし吳候事に付不取放候方可然と奉存
候左候は、此後も用立候事不少と被相考申候別に其人を得ると申事も隨
分六つヶ敷可有之且又たとへいか様之人物有之候とも只其説を取捨いた
し候外別に手段も無之就、心切にして博學なるが第一等に御座候其餘
之處は日本人之責に可有之歎と愚考仕候弟もいつれ當國より先發可致と
存申候付、是今一應於歐洲自然も拜青いたし候都合相叶候へは無此上本
懷に御座候處老兄佛國御滞在もいつ頃まで之思召候哉弟も一應は佛都へ
出浮度候得共迂路をとり候積りに付日限もしかと難申上候さて又當國着
已來も不快に、未一向形様も熟視不得仕候謁見は明三日相調候よし別に

(鈴木はは木金藏)

申上度事も不少候得共不得間暇御斷旁一書相呈申候別番之件千萬乍御面
倒鈴木氏に、御頼被成下大略相認めもらひ度御都合も御座候は、可然
奉願候其中時下御自玉第一に奉存候草々頓首

四月二日夜

孝允 頑夫

(西岡は西岡逾明)

西岡 老兄

尙々荷物一條態々御示し實に御面倒之儀と奉存候標番栗本へ相託し同
人取調らへ申上候と申事に付頓に御落手に相成候事と奉存候
○本文鈴木氏へ云々御願仕候處定、同氏も老兄へ御關係之用事可有之
其上折角老兄御勉強之御妨と相成候、遺憾に御座候間今村和郎と申
人へ自然御序ども御座候は、御頼被遣候、よろしく萬一よき都合も
無御座候へはいたし方無御座無御用捨奉願候
○別符千萬乍失敬御序之節奉願候

一二 廣澤健三宛書翰

明治五年四月十日

過日御手紙被下候處彼是取紛大に御無沙汰いたし申候彌御堅剛と珍重此事に御座候僕等も今以當府へ滞在逐日炎氣増進殆困却いたし申候さては學費等に付甚御困り之よし元來辨務使之方へも申談置候へども其中御間に候は、いか様とも御世話いたし可申尤僕等もいづれ不遠ニューヨルクへも罷越候都合に御座候處其迄之間いか、御都合に候哉御様子次第員數等も御申越に相成候は、其計らひ可致尤少々延引候もよろしく御座候へはニューヨルクへ罷越候上に、いか様とも御相談に預り可申候元より申までも無之事に御座候へども御修業中は可成丈け精々御節儉第一に存申候且又送り方に可相成學費等之儀始終延引候は此往きと、御困り之事に付御相談之上御國へも僕より申越置候もよろしく御座候先は爲其不取敢得貴意申候草々頓首

四月十日

孝 允

(謙三は廣澤健三)

謙 三 様

一三 吉富簡一宛書翰

明治五年四月廿四日

御手紙拜見過日は日々御妨申候爾後些御不快之由別、御自愛第一に存候貴諭之件々逐一承知御懇切明晩は在宿之に積りに御坐候懸念之様にと存じ候先は一應之御答迄草々頓首

五年四月廿四日

尚々何も御用心々々

鏡 面 生

箭 原 翁 貴 復

(箭原は矢原にて吉富簡一)

一四 西島青浦宛書翰

明治五年四月廿九日

亂筆御推讀々々帖は何卒箱に入紙に、よく封し不申、は長途中必損

本戸孝九文書卷十二 (明治五年四月)

三百五十九

し可申と存候文具之保護は吳々も御頼申候

當時起居如何余等毎事齟齬今以華府へ滞在困却いたし候先達を安場逸平と申候仁歸朝之折一書相託し新聞報知之事も認置申候相達候哉如何哉と存申候何卒月に一兩度朝野之事何事にあも少しも嫌疑は無之候に付長杉山などへも相頼日記之如く日々相認傳致偏に頼入候近來長州其他諸國之模様如何其近情も巨細承知いたし度只々傳承相待申候且留守中萬氣付可被下候さて田邊外務少丞此度一應歸朝候に付同氏再航之節五岳三洲靜逸蓮月等其他面白き分一二帖いたまぬよふ桐箱にあも入候を御送り被下度旅中一慰鬱これにしくもの無之候其節三洲へ御嘶何乎面白き一卷所望いたし度足下も是非揮毫是祈候晴湖も亦加之候得は妙元より小巻に無之あは洋服にあは袖に珍しかたくチヨツキ袋へ秘藏いたし候考に御座候先は爲其草々不一

〔長は長英三洲杉山孝敏は杉山孝〕

〔田邊は田邊太一〕

〔五岳は平野五岳三洲は長三洲靜逸は山中獻蓮月は太田垣蓮月尼〕

四月廿九日

允

〔青甫は西島青浦〕

青甫 足下

一五 西島青浦宛書翰

明治五年五月廿九日

大亂筆推讀是祈候左候を必御火中々々

四月十七日之書狀相達申候彌無異御消光珍重此事に候余等一行も且々無事尤此節は日々九十七八度より百度位之暑氣に實以困却いたし候其上相應之苦心も不少想察可被下候書中件々之新聞一見大に旅中之鬱を慰し申候逐々申越置候通何卒日記同様にしたし諸方之新聞朝野之風説申越に相成候邊企望いたし候世上之新聞誌などには上をあざけり或はうらみ候などの新聞は一向相知れ不申候に付却る真情之難穿處も有之申候其邊無嫌疑認入所祈に御座候近來使節連は衣服其外形も丈けは随分相調居候へとも先達も本朝之輕業いたし候ものにて傳二郎と歎申もの頭立二十余人來着芝居之舞臺に興行いたし候然處途中往來にも湯かたなど着し一